

山下善之と猶興学館

- 高崎における深井英五の少年時代をめぐって -

杉沢一美

1 はじめに

日本銀行第十三代総裁であった深井英五は、その著書『人物と思想』および『回顧七十年』の中で、少年時代に高崎で指導を受けた人物として、兄で小学校教員の深井景員^{かげかず}、小学校長の堤辰二^{みつた}、牧師の星野光多^{ゆこう}、猶興学館の山下善之をあげて思い出を記している。これらの人々が、基礎的な学問の素養と思想への目覚めを彼に与えたのは確かなことであろう。

また、高崎では、旧高崎藩士たちによる自由民権運動が盛んであり、彼は、次のように回想している。

「私の仲間の少年には、政府の大官となることを立身の目標とするものが多かつた。然し私は、藩閥の出身にあらずして官吏となるも志を伸ぶることは出来ないと言ふことを兄から屢々聞かされて、之に共鳴した。旧同藩士の壯齡者には国会開設促進の運動に参加したのもあつたが、首領株は国事犯に触れて蹉躓し、残余のものは全く意気消沈した。其の志を継ぐのは痛快だらうと云ふことが、一寸私の心に閃いたが、直ちに其の方向に進むべき途がないのだから、一場の晝夢に過ぎなかつた。」(『回顧七十年』8頁)

少年時代の彼が、家計の窮乏という別の問題はあつたにしても¹⁾、藩閥政府を批判的に見たが故に官吏を志さなかつたことや、自由民権運動に一定の共感を持ち、その運動の挫折に間近で接したらしいことが読み取れる。

彼の思想形成を考える場合、高崎時代については、英語学習からキリスト教入信、そして新島襄を通じての同志社入学が重要であり、牧師の星野光多の影響が多大であつたことは言うまでもない。しかし、それと同時に、彼を指導したその他の人々や自由民権運動の影響も考えないわけにはいかない。

ところが、彼の少年時代には事実関係に不明な点が少なくない。彼と猶興学館との関係や、猶興学館の山下善之の人物像は、彼の著書からは必ずしも明確ではなく、また、彼を指導した人々が自由民権運動に関係を持っていたのかどうかについても彼の著書では触れられていない。

ここでは、山下善之と猶興学館を中心に、少年時代の深井をめぐり事実関係のいくつかを検討しておきたい。

2 深井英五が描く山下善之と猶興学館

深井は『回顧七十年』で次のように書いている。

「幼少時の私に感化を与へた人の一として茲に挙げて置かねばならぬのは山下善之先生である。批の先生は旧藩士にして且つ私の兄景員の友人であり、暫く東京に遊学して郷里に帰り、政治運動に関心しながら、自らは之に参加せず、猶興学館と云ふ塾を開いて青年を指導した。学塾と云つても特に学課を定めるのではなく、普通の漢籍、パーレーの万国史等二三の英書及び当時の新刊書を随意に講述し、其間に時勢に関する論議を聴かせたのである。私が幼少にして内外時勢の動向を聊か聞知し得たるは主として先生の賜物である。」(11 - 12 頁)

また、『人物と思想』には次のように記している。

「明治十年代の高崎で、政治思想を鼓吹せし山下善之先生の猶興学館や、基督教の伝道と共に始めて正則の英語を教授せし星野光多先生の塾(後略)」(386 頁)

これらから見ると、深井にとって、山下は、政治思想や内外情勢を論ずる人物であり、その面での知見を与えてくれた恩師であった。また、猶興学館は、英学と漢学を教える学校ではあったものの、むしろ、山下が政治思想や内外情勢を講義した学校という印象が強いことがわかる²⁾。

しかし、山下が、どのような経歴や思想を持つ人物であったのかは、『人物と思想』や『回顧七十年』に記されていない。

しかも、『回顧七十年』の「政治運動に関心しながら、自らは之に参加せず」とのくだりは、山下が政治の傍観者であったかのようにも読めるため、深井の思想形成を扱う研究の中では次のような評価もなされることになった。

「山下の「政治運動に関心しながら自らは之に参加せず」という態度こそは、そのまま後年の深井の態度であった。」(江森巳之助 [1959])

しかしながら、山下が、猶興学館開校以前の時期に自由民権運動に積極的に参加していたことは、後でも見るように、群馬県の地域史研究で明らかになっている。彼は、旧高崎藩士たちによって結成された有信社に加わっており、さらに、有信社のメンバーが中核となった上毛自由党でも有力な一員として演説会で活躍した³⁾。

3 山下善之に関する研究

深井英五の恩師のうち、星野光多については星野達雄 [1987] という詳細な研究があり、深井景員と堤辰二については、群馬県教育史研究編さん委員会編 [1981] や高崎市教育史編さん委員会編 [1998] に小伝がまとめられている⁴⁾。それに対して、山下善之については、まとまった研究や小伝が存在しないように思われる⁵⁾。群馬県の自由民権運動の研究においても、彼の経歴や人物像までは扱われていないようである。

一方で、北海道の地域史研究やキリスト教史研究においては、彼は牧師として登場する⁶⁾。彼が牧師になったということは、深井英五の思想形成を扱う研究において注目されるべき

事柄と考えられるが、今まで知られていなかったのではなからうか。

幸いなことに、山下の経歴をある程度まで知ることができる近親者の記録や回想が存在する。

一つは、東京の長原教会（現在の日本基督教団長原教会）の牧師であった山本喜蔵による記録（山本喜蔵 [1943]）である。山下善之には妻のぶん（文子）との間に六男三女があり、そのうちの長女の夫が山本喜蔵であった。最晩年の山下はこの夫妻のもとで暮らした⁷⁾。この記録は、1943（昭和 18）年に栃木教会（現在の日本基督教会栃木教会）の教会史のために書かれたものである⁸⁾。山下は、1945（昭和 20）年に死去しているので、書かれた当時まだ存命である。

もう一つは、山下の五男である鳥居忠五郎による回想録（鳥居忠五郎 [1986]）である。鳥居忠五郎は、明治学院神学部を卒業後、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）声楽科に学び、青山師範学校・東京学芸大学の教授として音楽教育、合唱指導、教会音楽などに活躍した⁹⁾。この回想録の存在は、これまで歴史研究者の間で知られていなかったように思われる。その存在を見出して内容を紹介したのは池田晶信編著 [2000] が初めてではなからうか¹⁰⁾。

これらの記録や回想録を中心に、他の資料も用いながら、事実関係を確認してみたい。

4 山下善之の生年

深井英五を指導した四人のうち山下善之以外の三人の生年は従来の諸研究で明らかにされている。深井景員が 1849（嘉永 2）年生まれと最も年長で、堤辰二は 1856（安政 3）年生まれ、そして星野光多は 1860（万延元）年生まれである¹¹⁾。深井英五は、1871（明治 4）年生まれであるから、これら三人とは十歳から二十歳ほど離れていることになる。ちなみに、深井英五を直接教えたことはなかったものの猶興学館と関係を持つ竹越与三郎（三叉）は 1865（慶応元）年生まれで¹²⁾、星野光多と深井英五の中間にあたる。

では、山下善之の生年はいつであろうか。現在のところ次の三つの資料がある。

第一のものは、『慶應義塾入社帳』である。「入社」とは、現在で言えば入学に相当し、この台帳は、慶應義塾の入学者の氏名、生年、住所、保証人などを記したものである。そこに、入学者として山下善之の名があり、安政 4 巳年 11 月生まれと記入されている¹³⁾。安政 4 年は、西暦では 1857 年にあたる。

第二のものは、キリスト教関係の名簿類である。『基督教年鑑』の昭和 6 年版と同 7 年版の人名録に彼が載っており、安政 3 年 11 月 28 日生まれとなっている¹⁴⁾。安政 3 年は、西暦では 1856 年にあたる。また、1935（昭和 10）年 4 月調べの『七十路会ななそじかいの会員名簿』（キリスト教界で 70 歳を超える人々の会の名簿）は、彼について 80 歳と記載しており¹⁵⁾、この年齢は数え年であろうから、生年を逆算すると同じく 1856 年となる。ちなみに、この名簿では、1856 年生まれである海老名弾正や小崎弘道が同じく 80 歳として掲載されているため、この計算で正しいと考えられる。日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983a]

(31頁)でもこの生年としている。

第三のものは、近親者による記録である。山本喜蔵[1943]では1855年生まれとしており、鳥居忠五郎[1986](78頁)でも、1855(安政^マ3)年11月28日生まれとしている。しかし、これらは、何らかの誤りにより安政3年を1856年ではなくて1855年とし、それが近親者の間で共有されてしまった可能性も考えられる。

結論を出すことはできないが、いずれにしても、山下善之は、1855(安政2)年から1857(安政4)年の生まれであろうから、堤辰二とほぼ同じ年齢で、深井英五よりも15歳ほど年上ということになる。

5 山下善之と前橋

深井英五は、『回顧七十年』(11、20頁)で、山下善之を旧高崎藩士としている。また、群馬県の地域史研究においてもそう考えられてきたように思われる。しかし、鳥居忠五郎[1986](78頁)によれば、山下善之は、高崎藩士の山下家に生まれ、成人後、年月日は不明であるが、前橋藩士の山下領平の養子となったという。山本喜蔵[1943]においても同様に、山下善之は、高崎藩の祐筆頭取を勤めた山下九如の子であり、後に前橋藩士の山下領平の養嗣子となったという。

養嗣子になったのは成人後だという点と、山下善之の生年からみて、また、藩を越えた養子縁組は考えにくいことから、養嗣子となった時期は廃藩置県後のことではないかと推測される。

高崎藩と前橋藩の山下家がどのような間柄であったのかは不明である。しかし、以下のように見た限りでは、この近親者の伝聞内容は確かなものと思われる。

まず、山下善之が、高崎藩士の山下家の生まれであることについては、彼の五男である鳥居忠五郎が、忠五郎にとっては伯父にあたる高崎の山下家に墓参りに行った子供の頃の思い出を記しており、確かであろう¹⁶⁾。また、その家が祐筆の家柄であることについては、当時の高崎藩士で山下姓を持つ人々が祐筆ないしは史生(書記官)であることから¹⁷⁾、やはり確かであると思われる。

一方、山下善之が、前橋藩士の山下領平の養子となったことに関しても、傍証となるものが今のところ三つ存在する。

一つは、福澤諭吉の『明治十年以降の知友名簿』において、「前橋藩十二年二月入社 山下善之」との記述があることである¹⁸⁾。山下善之は、1879(明治12)年2月に慶應義塾に入学し、福澤諭吉と面会した際に、前橋藩士と名乗ったのであろう。

二つ目の傍証は、前橋藩に山下領平という人物の存在が確認できることである。前橋市史編さん委員会編[1975]が、熊谷県の貫属調査の短冊帳に基づいて作成し掲載した旧前橋藩士の氏名と住居の一覧に山下領平の名がある¹⁹⁾。この山下領平は、明治維新以前の前橋藩の記録では、山下領右衛門という名で記載されている人物と思われる²⁰⁾。

三つ目の傍証は、『慶應義塾入社帳』に記入された山下善之の住所が山下領右衛門(=領

平か)のそれと重なることである。山下善之の住所は勢多郡萩村八番地と記されており^{2 1)}、これに対して、山下領右衛門の住居は東萩小路西側六番であった^{2 2)}。萩小路は、1876(明治 9)年に萩村となり、1889(明治 22)年の町村合併で前橋町(後の前橋市)の一部となった地域である^{2 3)}。現在の前橋市昭和町周辺にあたる。

以上のように、山下善之が前橋藩士の養嗣子になったとの近親者の伝聞は確かなものと思われる。それにもかかわらず、彼が高崎藩士として周囲に記憶されている理由は、彼が養嗣子になったのが成人後であって、その前に高崎藩で成長して元服したことや、おそらく養嗣子になったのが廃藩置県後であろうこと、加えて、旧高崎藩士による有信社に加わったことや、後に高崎に生活の場を移したことからではなかろうか^{2 4)}。

高崎藩と前橋藩は、互いの城が直線で 10 キロメートル程度の距離であり、両藩とも親藩であった。しかし、高崎では、士族の自由民権運動が盛んになったのに対し、前橋では、士族の製糸会社が盛んになる。萩原進[1959a](72 - 73 頁)は、両藩の士族の性格の違いを次の二点に見ている。第一に、前橋の士族は、横浜開港以来、内職として座繰製糸をしていたので生活が豊かであった。これに対して高崎の士族にはこうした生業がなかった。第二に、高崎藩では、1869(明治 2)年の五万石騒動という大規模な農民一揆や、藩政改革での内紛とその処断事件などがあって、士族が、革新的な過激行動に出る素地があったという。

山下善之が、旧高崎藩士であったということは、彼の自由民権運動への参加を理解する上でわかりやすい。それに比べると、旧前橋藩士の養嗣子だったということが持つ意味は見えにくい。しかし、今後、彼を理解する上で何らかの意味を持ってくる可能性もあるだろう。しかも、次に述べるように、彼の妻は、前橋の資産家の娘だったという。

6 山下善之の妻と前橋

山下善之の妻ぶん(文子)は、鳥居忠五郎[1986](112 頁)によれば、1864(元治元)年に前橋の才川(才川村、現在の前橋市若宮町のあたり)に生まれており、実家は、相当な資産家だったらしいという。

横浜開港以来、前橋は、関東最大の生糸集散地として繁栄し、その中でも、才川は、明治期に、前橋の製糸業や生糸取引の中心の一つとなる地区である^{2 5)}。彼女の生家は不明であるが、相当な資産家だったとすれば、何らかの形で生糸に関係していた可能性もあろう。

鳥居忠五郎[1986](112 頁)によれば、彼女は、裁縫や手芸が得意で、後に北海道の伊達に住んだ際には、家には紐網機も置いてあり、時折、大勢の女性が集まって作業をしたという。また、北海道の遠軽^{えんがる}では街や村の娘たちに嫁入り前の裁縫を教授したという。遠軽町役場編[1957](204 頁)によれば、遠軽においては、「文子夫人によって娘たちがはじめて組織だった裁縫を習うことができたし、フランス刺繍を学んだり、ミシンの踏方を教えられた」という。

二人がどのような経緯で結ばれたのかは不明であるが、萩村と才川村は 1 キロメートル

余りしか離れていない。結婚の時期も不明であるが、長男が1883(明治16)年頃の生まれだと思われるので²⁶⁾、それ以前であることは確かである。山下善之は、妻の実家との往来も含めて、生糸関係の実業家とのつながりを持っていた可能性もあろう。

7 山下善之と慶應義塾

『慶應義塾入社帳』と福澤諭吉の『明治十年以降の知友名簿』から、山下善之は、1879(明治12)年2月に慶應義塾に入学したことがわかる。その時の年齢は、満21歳4ヶ月と入社帳に記載されている²⁷⁾。

ただし、それ以前に彼が英語を学んだことがあったのかどうかや、慶應義塾以外の学校にも在学したことがあったのかどうかは不明である²⁸⁾。

入学後の山下善之の動向はどうであったのだろうか。

松崎欣一[1998]は、慶應義塾の学生の成績記録を元にした「明治12年予備科生の進級状況」の表を掲載している。それによると、山下善之は、入学した年の3つの学期のうち最初の2つしか在籍していない²⁹⁾。理由は不明であるが、1年間も在籍せずに去っている。ただ、当時はそうした例は多かったようである³⁰⁾。

在学がごく短期間であったとはいえ、山下善之は、翌年からの演説会での活動を考えると、福澤諭吉が提唱した「演説」というものに触発される機会があったのではないだろうか³¹⁾。この時期の慶應義塾生が、三田演説会や、塾生の演説グループの演説会を聞きに出かけていることは、松崎欣一[1998](第1章第1節)による塾生の日記の分析からうかがえる。

萩原進[1959a](74頁)や群馬県史編さん委員会編[1991](口絵)などに掲載されている高崎の有信社の写真は、この年に撮影されたものであり、上毛自由党の幹部となる宮部襄^{のぼる}や長坂八郎ら8人(いずれも旧高崎藩士)とともに山下善之の姿がある³²⁾。人物の着物から見ると寒い時期の撮影と思われるので、山下善之の慶應義塾への入学前あるいは帰郷後に高崎で撮影したものだとすれば、季節的に矛盾しない。この写真で注目したいのは、前列中央の椅子に座っているのが、中心人物の宮部襄や長坂八郎ではなくて山下善之であり、山下善之を囲む形の人物配置に見えることである。このため、彼の遊学との関係もあるように思える³³⁾。

8 山下善之と自由民権運動

この節では、萩原進[1959a]、清水吉二[1984]、岩根承成[2004]などによって、自由民権運動における山下善之の動向を中心にしながら、旧高崎藩士であった深井景員や堤辰二と自由民権運動の関わりも確認しておきたい³⁴⁾。

山下は、慶應義塾に在学した翌年である1880(明治13)年に、高崎において同志とともに政談演説会を開催し、中心的な役割を果たした³⁵⁾。当時の新聞は次のように報じている。

「当県高崎駅の有信社々員が頃日同所に於いて政談演説会を開きし節、山下善之が上毛

人民に告ぐといふ論題にて上州人民八国会開設の志なきを嘆ずる旨、雄弁を奮つて説かれたれば聴衆大いに感動したりといふ」「同所有志者山下善之、大澤安次郎、田中純端、深井寛八、長坂八郎、豊島貞造、伊賀我何人、其他数名が申合せ、以来毎月三四回づつ政談演説会及討論会を開くと云事」(『群馬新聞』1880(明治13)年8月7日)

「当新聞六十六号へも記せし本県高崎の有志者なる山下善之氏が会主で昨日午後八時より同所柳川町磯野幸吉方にて演説会を開かれし(後略)」(『群馬新聞』1880(明治13)年8月18日)

この18日の記事の方には、演題と弁士の名前も出ており、山下の演題は、「改正定約の草按を読んで感あり」であった。

なお、同じくこの記事では、後述する旧前橋藩士の斎藤壬生雄も弁士に加わっていることがわかるほか、前橋の富樫竹次、生方柳太郎らが、教育を主とした演説会を前橋の本町の生糸^{あらため}改会所で毎月開く事になったこともあわせて書かれている。ただし、前橋の演説会については山下との関連はわからない。

1881(明治14)年9月には、板垣退助と中島信行の一行が高崎に立ち寄り、高崎の人々からたいへんな歓迎を受けた。その際にも、山下は重要な役割を果たした³⁶⁾。

この時の高崎の様子を報ずる『上毛新聞』同年10月2日および4日の記事から山下に関する部分を具体的に見ると、まず、「同駅四十二ヶ町の有志者八、(中略)山下善之を以て両君出迎の為に東京まで差遣し」とある。また、9月28日に高崎でおこなわれた板垣らの演説会では、「午後四時演説おわり会主山下善之八是より大信寺におみて親睦宴会を開くにより、有志の諸君八来会せらるべしと大声に述べ聴衆一同解散したれば(後略)」とあり、山下が、この演説会の会主となっていることがわかる。そして、親睦会は、「両君へ祝辞を呈し、堤辰二之を朗読す、山下善之八之に継で席上に立て演説す」という形で開始されている。

ここには堤辰二の名もある。堤も、自由民権運動と無縁ではなかったわけである³⁷⁾。

翌年になると、上毛自由党は、喜多方事件での福島自由党への応援をおこない、山下は、逮捕者家族の救援活動などにあたっていた模様である³⁸⁾。喜多方・福島事件などへの高崎からの救援募金の募金者リスト(1883(明治16)年1月27日の『自由新聞』に掲載)にも彼の名がある。

このリストには深井景員の名もある。ということは、深井景員もまた、自由民権運動と無縁でなかったのであり、冒頭に引用した深井英五の回想もうなずける。

なお、清水吉二[2001]によれば、これより前の1880(明治13)年の年末、旧高崎藩主の大河内輝聲^{てるな}が、経済的な理由から家扶の旧藩士を解雇した事件で、深井景員は、宮部襄、長坂八郎、山下善之らとともに旧藩士の採用を大河内輝聲に働きかけてもいた。清水吉二[1984](91頁)同[2001]は、深井景員も有信社の社員の一人と推測している³⁹⁾。

深井英五は、『回顧七十年』(11、20頁)で、深井景員が、堤辰二および山下善之と友人であったと述べている。この三人の結びつきは、上の諸資料からもうかがえる。

1883(明治16)年の5月20日には、高崎の新紺屋町の藤森座という劇場で、立憲改進黨などを批判する演説会(偽党攻撃大演説会)が開かれた⁴⁰⁾。『自由新聞』(同年5月24日)によれば、900名が参加し、満場立錐の余地がなくなったという。その演説会の最後を締めくくったのは、山下による「郷原^{きょうげん}八徳の賊なり」という演説であった。この演題は『論語』『孟子』から来ており、この演題の意味から推測すれば、演説の内容は、運動に立ち上がることを呼びかけるものであったろう⁴¹⁾。

同年7月8日には、山下は、群馬県中之条の演説会に弁士の一人として出かけている⁴²⁾。ただし、これを報じた『自由新聞』(同年7月14日)の記事では演題は不明である⁴³⁾。

以上のように拾い出してくると、山下は、1883(明治16)年の中頃まで演説会を中心に活躍していたことが確認できる。ところが、その後の運動においては、他の旧高崎藩士たちの名前が引き続きあっても、彼の名前は見るができなくなる。ここから推測すると、彼が運動から離れた時期は、この年の後半ではないだろうか。

岩根承成[2004]がまとめるところによれば、この頃、上毛自由党の運動は転換しつつあった。松方デフレの下で、群馬県では、1883(明治16)年の3月と11、12月に負債農民騒擾が集中的に発生した。その時点では、上毛自由党は、負債農民への直接的な関係を持たなかったが、しかし、自由党の「減税建白」運動の方針に沿って、翌年に入ると、活動の重点を、それまでの都市部中心から、農村地帯での党勢拡大、農民組織化へと移行させた。そして、5月には、急進派と負債農民による武装蜂起事件である群馬事件が発生する。そこでは、同月に予定されていた上野 - 高崎間の鉄道開業式で天皇と政府高官を襲撃して政府転覆を図る計画もあった。また、直前の4月に、政府の密偵と疑われた党員が殺害される事件(照山峻三殺害事件)が起き、それにより宮部襄などの幹部が罪に問われることになった⁴⁴⁾。

山下が運動から離れた時期は、こうした1884(明治17)年の運動の急進化の前にあたるようである。彼の離脱の理由はこれらに関係していた可能性もあろう。

自由党員名簿でも彼の離脱が確認できるように思われる。1882(明治15)年10月4日および5日の『自由新聞』に掲載された新党員の名簿には彼の名があるが、しかし、1884(明治17)年5月の『自由党員名簿』にはその名がない⁴⁵⁾。

猶興学館は1884(明治17)年10月に開校した。その時期には既に、『回顧七十年』の記述のとおり、彼は政治運動に参加しなくなっていたのであろう。

なお、上毛自由党の運動は、宮部襄ら幹部の逮捕などにより大きな打撃を受けることになる⁴⁶⁾。冒頭で見た『回顧七十年』の「首領株は国事犯に触れて蹉躓し、残余のものは全く意気消沈した。」(8頁)との記述は、このあたりのことを指していると思われる。

9 猶興学館の設立

1884(明治17)年頃からの群馬県における英学校の隆盛については、萩原進[1959c]や群馬県教育史研究編さん委員会編[1973]に詳しい。(ただし、それらには、深井英五が高

崎藩の英学校で学んだとする説が述べられているが、彼の生年から考えて無理であり、高崎藩の英学校について詳細に調査した清水吉二〔1999〕によって否定されている⁴⁷⁾。

ここでは、猶興学館の設立について、群馬県の地域史研究の諸成果に依拠しながら見ておきたい。

群馬県教育会〔1927〕は、私立学校から群馬県に提出された設廃願を資料にして私立学校の一覧表を作成している⁴⁸⁾。それによれば、猶興学館は、1884（明治17）年10月、高崎の柳川町に開校した。学科は英漢学、入学年齢は満14歳以上、修学年限は3年半であった。ここで、入学年齢が満14歳以上となっているのは、当時の小学校が8年間の課程であり、卒業時に満14歳になるためである⁴⁹⁾。

学校の名称の「猶興」は、『孟子』の巻第十三「尽心章句上」から採ったものであろう。この言葉は、自ら進んで立ち上がるといった意味であり、当時の結社や学校の名称に好んで使われたようである⁵⁰⁾。

慶應義塾生の有力な演説グループとして猶興社があったが、それにあやかっただろうかまでは不明である⁵¹⁾。猶興社は、山下善之が慶應義塾に入学した同じ年の春に発足しており、最後の高崎藩主の弟である大河内輝剛てるかたがその一員であって、しかもその家が集会所となっていた⁵²⁾。しかし、猶興社の社員であった犬養毅は立憲改進黨の結党に参加しており、それに対して、山下は、先に見たように同党を批判する演説会で弁士を務めている。

開校から約2年半後、『西群馬片岡教育通信録』に山下は「猶興学館景況通信」という記事を寄せた。そこには次のようにあり、教育内容がうかがわれる。

「本館八正則英語ヲ以テ諸学科ヲ教授シ且ツ和漢文学ノ一科ヲ加ヘ専ラ作文ヲ修習セシム」「目下上級ハナシヨナル第四読本小文典万国史等ヲ読ミ日用簡易ノ会話ヲナシ得ルニ止レリ」（『西群馬片岡教育通信録』第1号、1887（明治20）年3月31日）

猶興学館の設立者は、一覧表では、清水元造ほか二名となっている。二名の氏名はここからは不明であるが、後年の届出書類と新聞広告から見て、関根作三郎と藤巻喜兵衛であろう⁵³⁾。また、その届出書類から、正式な館主は山下善之ではなくて清水元造であることがわかる。

清水元造ら三名は高崎の有力な事業主たちであった。それについては後で述べることにして、ここでは、設立時における堤辰二との関係を指摘しておきたい。

『人物と思想』（327頁）や『回顧七十年』（21頁）によれば、深井英五に英語を学ぶよう勧めたのは小学校長の堤辰二であった。そして、脚色もあるように思われるが、報知新聞社通信部編〔1930〕は、猶興学館の設立を次のように書いている⁵⁴⁾。

「堤先生の英語を習はねば駄目だといふ説に、非常に共鳴したのが本町一丁目の藤巻喜兵衛といふ金持の呉服商だつた。商人ではあつたが喜兵衛は当時既に堤先生の説に合して英語を広く教へたいと、明治十六年に柳川町に猶興館と呼ぶ英学塾を清水源蔵マツといふ人と共にはじめた。先生兼監督には山下善之という人がこれにあつた。この英学塾の開校を聞いて真先に入塾を申し込んだ人が四人あつた。深井英五、長坂鑿次郎かんじろう、土橋佐多吉、黒

川某といふ四名であつた。」(10頁)

これによれば、堤の唱える英語教育の重要性に共鳴して、藤巻らが猶興学館を設立したことになる。

堤は、深井に英語を学ぶよう強く勧めたことから考えて、高崎での英語教育に強い問題関心があったと見るのが自然であろう。堤が、高崎の有力者である藤巻や旧知の山下とこの件で相談する機会を持ったとしても不思議ではない⁵⁵⁾。

そして、資金面については藤巻らが主導し、教育面については山下が主導したのではないだろうか。山下については、後の高崎英和学校の開校記念式典で生徒の一人が述べた祝辞に次のような一節があり、そのことがうかがわれる。

「嚮キニ山下先生ノ奮発ニ因テノ学館ヲ創立シテ、積日生徒増加シ学業日ニ進歩シ、頗ル隆盛ノ今日ニ至ルモ、是レ館則ノ全備セルト授業ノ懇切ヨリ出デタルニ外ナラザルハ、即チ猶興学館ナリ」(『上野新報』1887(明治20)年9月17日より)

おそらく、山下が教育現場を取り仕切ったことから、生徒によっては、山下が館主であるとの印象を持ったのであろう。深井が、後年、「猶興学館の館主山下善之先生」(深井英五[1937])と表現したことがあったのは、このためではないだろうか。

その後の経過からは、山下が、堤や深井景員と教育分野で協力関係になっていることがうかがえる。堤と深井景員は、他の有志三人とともに西群馬片岡教育会を1884(明治17)年2月に設立しており、山下が、先に見た記事を寄せたのは、他ならぬ同教育会の雑誌の創刊号であった⁵⁶⁾。また、後に述べるように、高崎英和学校の開校式典には、堤と深井景員も出席して祝いの演説をしている。

10 猶興学館・高崎英和学校の設立者たち

猶興学館は、入学希望者増大に伴って、設立後2年半もたたないうちに早くも拡張が計画された。前に触れた山下善之の「猶興学館景況通信」には次のようにある。

「当地人民八時々洋人ノ来遊モアリテ實際不便ヲ感シタルヲ以テ随テ内地雑居ノ未来ヲモ想像シ大ニ悟ル所アリト見ヘ近来八入学ヲ申込ムモノ陸續踵ヲ接シ今日ノ儘ニテ八到底其需ニ応シ難キ場合ニ至レリ故ニ館舎ヲ増築シ教師ヲ増聘シ諸事規模ヲ拡張セント目下計画ナリ猶後來本館ノ景況時々報道ヲ怠ラサルベシ」(『西群馬片岡教育通信録』第1号、1887(明治20)年3月31日)

そして、その6月には、館主の清水元造から、校名を高崎英和学校に変更して設立者を四名増員する届出が群馬県に出され、7月6日に県に受理された⁵⁷⁾。この間に、高崎の柳川町内の拡張移転先では建築工事が進められたらしく、9月15日、洋風校舎や寄宿舎を備えた新校地において高崎英和学校の開校式典がおこなわれた⁵⁸⁾。

深井英五は、その前年の秋に同志社に入学しているので、既に高崎にはいない。ただ、猶興学館の設立者を考える上で、この高崎英和学校への変更の際に新たに設立者に加わった四人も合わせて見ておくのが良いように思われる。岡本六左衛門、中島仙助、西岡半九

郎、矢島八郎の四人である⁵⁹。

高崎の地域史研究をひも解くならば直ちにわかるように、この四人を加えた設立者七人のうちの多くが、高崎の近代史における政治・経済の有力者であった。特に、矢島は、県議会議員、初代高崎町長、衆議院議員、初代高崎市長などを勤め、高崎の都市基盤整備への貢献を高く評価されている人物であり、関根も、市会議員、県議会議員、高崎市長などを歴任する有力者であった⁶⁰。

この七人のうち、少なくとも五人（関根、中島、西岡、藤巻、矢島）の家は、明治維新前からの高崎の有力な商人であったことが確認できる⁶¹。そして、明治 10 年代においては、七人のいずれもが高崎の有力な事業主となっていた。例えば、表 1 に示すように⁶²、1885（明治 18）年の『上州高崎繁栄勉強一覽』という見立て番付（相撲の番付のような一覽表）において、彼らの名前が、別格として中央に、あるいは高位の番付として最上段に書かれているのを見ることができる。

さらに、1888（明治 21）年の高崎町会議員選挙では、五人（関根、中島、西岡、藤巻、矢島）が当選している⁶³。

表 1 猶興学館および高崎英和学校の設立者と、高崎の見立て番付や広告

名前 (屋号)	所在地	『上州高崎繁栄 勉強一覽』 明治 18 年		『高崎繁昌記』 明治 30 年	『高崎繁昌鑑』 明治 31 年	
		業種	番付	業種	業種	番付
岡本六左衛門 (柏屋)	中紺屋町	呉フク	最上段	呉服太物・唐物類	呉服太物	最上段
清水元造	本町	子リ油	最上段	-	-	-
関根作三郎	連雀町	材木	年寄	材木商 人造肥料・佐倉炭 販売	材木	最上段
中島仙助 (和泉屋)	中紺屋町	絹商	勸進元	生絹染・絹太織問 屋	絹太織	中央欄
西岡半九郎 (伊勢田)	田町	子リ油	最上段	万煉油問屋	練油	中央欄
藤巻喜兵衛 (銀杏屋)	本町	呉フク	最上段	各国織物商	呉服太物	中央欄
矢島八郎	あらまち 新町	中牛馬	年寄	-	-	-

(備考 1) 屋号については、高崎市編 [1927b] 298 - 300 頁も参照した。

(備考 2) 『高崎繁昌記』などでは、矢島八郎は、個人名が出ていない代わりに、上野鉄道株式会社など取締役を務めた会社が出ている。

(備考 3) 『高崎繁昌記』では岡本六左衛門ではなく岡本英三郎となっている。

後になるが、1896（明治 29）年に設立された高崎商業会議所の最初の議員には、三人（岡本英三郎、関根、藤巻）が含まれている⁶⁴。ここで、岡本英三郎は、岡本六左衛門の跡継ぎであり、1898（明治 31）年から 1900（明治 33）年までの間に六左衛門を襲名したようで

ある⁶⁵。また、1897（明治30）年の広告冊子である『高崎繁昌記』やその翌年の見立て番付である『高崎繁昌鑑』においても、清水を除いて、彼らやその後継者の名前（あるいはその会社名）を引き続き見ることができる。

このように確認してみると、猶興学館や高崎英和学校を設立した人々は、明治維新前からの高崎の有力な商人が多く、明治10年代から20年代において高崎の有力な事業主として活躍した人々であったことがわかる。

1.1 藤巻喜兵衛のキリスト教入信

猶興学館の設立者三人のうち、藤巻喜兵衛は、猶興学館とキリスト教の関係を考える上で重要な人物である。

幸いなことに、藤巻の訾咳に接した吉田元による伝記（吉田元〔1984〕）により多くのことを知ることができる⁶⁶。同書によれば、彼は、1853（嘉永6）年の生まれであるから、堤辰二より3歳ほど年長である。彼は養子であり、藤巻家を相続して喜兵衛を名乗ったのは1878（明治11）年であった。

彼が、キリスト教に接したのは、牧師の奥野昌綱による同年の高崎伝道であった。彼が奥野の説話を聞いたのは、次のようなことからだったという。

「街道往来の名士達の来訪を受け、これをもてなしながら、海内の出来事や珍事に耳を傾け、自らの見聞をひろくし、時勢に接する機会を持つことは、当時の分限者の常であり、楽しみの一つでもあった」（吉田元〔1984〕5頁）

こうした態度は、他の有力者たちにもある程度まで共通したものだっただかもしれない。

奥野の説話に感動した藤巻は、自宅の一部を宣教の場に提供したという⁶⁷。

星野光多が高崎で伝道を開始したのは、その5年ほど後の1883（明治16）年7月であった⁶⁸。山下が、自由民権運動の弁士として最後の活動をしている頃である。そして、翌1884（明治17）年5月17日には、西群馬教会（現在の日本基督教団高崎教会）が設立され、星野がその牧師となった⁶⁹。猶興学館が開設される約5ヶ月前にあたる。

星野の伝道記録である『上毛高崎倉賀野伝道史』1号によると、藤巻は、当初より星野に面会していた。そして、教会設立の約1年後の1885（明治18）年6月21日に、岡本六左衛門とともに星野から受洗した⁷⁰。この時には既に猶興学館は開校している。

猶興学館にとって、設立者の一人である藤巻がキリスト教に入信したことは大きな意味を持ち、高崎英和学校への校名変更の一つの重要な要因になったと思われる。

ところで、深井英五が星野から受洗したのは藤巻の約半年後である。藤巻は、自らの家で家庭集会を何度も開き、受洗前の深井も参加していたという⁷¹。

『人物と思想』（329頁）と『回顧七十年』（11頁）によれば、深井は、同志社での学費について、新島襄のもたらした奨学金の他に西群馬教会の有志たちからも援助を受けた⁷²。吉田元〔1984〕（11頁）からは、この有志の一人が藤巻喜兵衛であったことがわかる。藤巻は、優秀な深井を愛し、将来は牧師となる約束のもとに同志社入学の奨学金を与えた。し

かし、深井が別の道をたどってしまったので、藤巻は非常に残念がっていたという⁷³。1932（昭和7）年3月31日に藤巻が永眠し、その告別式に参加した吉田元によれば、深井の大きな花輪が墓前に飾られ、「墓前にぬかづく彼（深井のこと＝引用者）の姿が印象的であった」⁷⁴。藤巻は深井の恩人であり、深井はそれを忘れなかった。

12 山下善之のキリスト教入信

山下善之は、猶興学館の設立から約2年半後の1887（明治20）年4月3日に西群馬教会で受洗した⁷⁵。高崎英和学校の開校式典の約5ヶ月前である。ただし、この時点では、深井は既に高崎にいない。

山下がなぜキリスト教に入信するに至ったかは不明である。しかし、深井と同じく英語を通じて星野に接近し、その感化を受けたことは、一つの可能性として考えられる。報知新聞社通信部編〔1930〕には次のようにある。

「唯一の師の山下先生は英語の研究からつひに熱心なキリスト教の信仰を持つに至つて、とうとう先生の仕事を棄てて当時高崎町に来たキリスト教の牧師星野光多先生に師事して、東京の明治学院に走つてしまつた。」

星野は、高い英語力を持ち、伝道のかたわら英語を教えたため、その下に英語を学ぼうとする青少年が集まつた⁷⁶。星野は次のように回想している。

「私は伝道の方法として小学校の上級生に英語を教へてみたが、之は好結果を見たのであつた。彼等は、耶蘇教は嫌いであるが、英語は習いたいといふので、教会の裏門から窃かに忍んでくると有様であつた。ところで彼らのうちからも信仰を起すものがあつて、教会は愈々好況に向ふたのである。」（星野達雄〔1987〕114頁より）

深井もそのような青少年の一人であり、深井自身が次のように書いている。

「堤先生の勧めによつて英語の学習に志した所の私は、東京の某塾で英語を修めて来たといふ郷里の先輩に教を乞うたけれども、暫くにして失望に終わつた。其処へ、西群馬教会（今の高崎教会の前身）の牧師として来られた星野光多先生が伝道の傍ら青年に教へるといふことを聞いて、其の門に入つた。（中略）私は其の教を受け、始めて英語といふものの要領を得た。」（『人物と思想』328頁）

この「郷里の先輩」とは山下のことを指していると思われる。語学について図抜けた秀才であつた深井は⁷⁷、山下と猶興学館にあきたらなくなり、星野に英語を習うようになったのであろう。実業之日本社編〔1930〕にも次のようにある。

深井は、「小学生時代から、教師の一人について特に英語を勉強してみたが、やがてその教師の方が氏の質問に答へることが出来ぬほどになつてしまつた。」「当時高崎の町に星野光多といふ基督教の牧師が居て、神の福音を説く傍ら、子弟を集めて英語を教へてみた。深井氏はついに星野氏の門を叩くべく決心し、父の許を乞ふた。」

こうした星野の評判を聞いて、山下が、英語の研究や、猶興学館の拡張の検討といった方面から、藤巻などの紹介で星野に会い、そして深井と同じく星野の感化を受けてキリス

ト教入信に至ったのは、一つの可能性として考えられることである⁷⁸⁾。

山下の受洗と、その約 2 ヶ月後の高崎英和学校への校名変更の届出は、一つの流れの中の関連しあう出来事であったと思われる。

1.3 岡本六左衛門と竹越与三郎の関係

高崎英和学校の設立者に加わる岡本六左衛門は、猶興学館へのキリスト教の影響を考える上で重要なもう一人の人物である。

まず、星野光多と彼の関係から見ていこう。

星野達雄 [1987] (第 1 章) によれば、星野光多は、群馬県の沼田の豪農の家の出身であった。そして、その勉学の過程において、山下と同年の 1879 (明治 12) 年 5 月から慶應義塾で約 3 年間学んだことがあり、交詢社の社員にもなり、群馬県下の演説会で政治演説をしたこともあった。彼は、この活動の中で湯浅治郎と相知る仲になったという⁷⁹⁾。

周知のように、湯浅治郎は、新島襄の実家のある群馬県の安中^{あんなか}で醸造業を営む家の出身で、県会議員や後には国会議員にも当選する有力者であり、新島襄の強力な後援者であった⁸⁰⁾。(なお、安中と高崎は、直線距離で 10 キロメートルほどしか離れていない。)

湯浅は、星野の高崎伝道開始の前年である 1882 (明治 15) 年に、星野に対して高崎の岡本六左衛門を紹介した⁸¹⁾。

湯浅と岡本がどのような経緯で親しくなったのかは不明であるが、二人は信頼関係にあり、岡本はキリスト教への一定の理解を既に持っていたと思われる。

このことを示すのが松本^{またたろう}亦太郎の回顧録 (松本亦太郎 [1939]) 60 - 64 頁である⁸²⁾。松本亦太郎は、高崎の隣の宿場町である倉賀野の有力者、松本勘十郎の養子であった。彼は、湯浅治郎の長男の一郎および岡本の次男の彦八郎と一緒に、1882 (明治 15) 年 9 月に同志社英学校に入学した⁸³⁾。亦太郎を学生にすることに理解のない養父の勘十郎に、亦太郎の同志社入学を強く勧めたのは、勘十郎の知人である湯浅治郎と、亦太郎の実母の親戚である岡本六左衛門であったという⁸⁴⁾。

星野が高崎に来て伝道を開始したのは、湯浅一郎、岡本彦八郎、松本亦太郎の三人が同志社に入学した翌年の 7 月であった。岡本六左衛門と松本勘十郎は、星野の伝道開始時からの重要な協力者となった。岡本は、先の表 1 に掲げたとおり、高崎の中紺屋町の呉服商であったが、高崎の田町に潤沢社という貸金業の会社も設立しており、そこが、教会設立以前における星野の宿泊、集会、祈祷会などの場所としてしばしば使われた⁸⁵⁾。

1884 (明治 17) 年に西群馬教会が設立され、その 1 年後の 6 月 21 日、岡本は、藤巻とともに受洗した。彼の跡継ぎの英三郎も、その 2 ヶ月ほど前に受洗している⁸⁶⁾。

彼の次男の彦八郎は、同志社入学後、1884 (明治 17) 年に、同志社の学生に生じたりバイバル (多数の人に一気に信仰が生まれる状態) において指導者の一人になっており⁸⁷⁾、『上毛高崎倉賀野伝道史』1 号によれば、星野の高崎伝道にも協力していた。

竹越と猶興学館の関係については後で述べるが、竹越が 1887 (明治 20) 年に高崎で宿と

したのは、高崎の田町の「岡本彦八郎方」であった⁸⁸⁾。これは、星野が宿泊したのと同じ田町の貸金業の店ではないだろうか。

竹越は、この高崎滞在中、彦八郎との共訳によるバジヨットの『英国憲法之真相』を7月に、単著である『政海之新潮』を8月に、いずれも英三郎を出版人として公刊した⁸⁹⁾。バジヨットの翻訳は、竹越が、直ぐ後で触れる前橋在住の頃から彦八郎と出版準備をしていたものと推測されている⁹⁰⁾。

岡本六左衛門とその息子たちは、湯浅と同志社を通じてキリスト教に接近し、竹越とも密接な関係を持っていた。六左衛門が高崎英和学校の設立者に加わったことは、藤巻と山下の受洗とともに、学校の性格にとって重要な意味を持っていると思われる。

14 竹越与三郎と猶興学館

青年期の竹越与三郎に関する研究(竹越熊三郎[1963]、飯田裕子[1976]、高坂信彦[2002]第1章)によれば、竹越は、1885(明治18)年に小崎弘道の推薦で海老名弾正の前橋教会堂に派遣された⁹¹⁾。彼は、1887(明治20)年5月まで前橋におり、この間、前橋英学校の教師を勤め、また、上毛青年会や前橋青年談話会といった革新的な青年会で活躍した⁹²⁾。竹越熊三郎[1963](65-66頁)によれば、星野と竹越が知り合ったのはこの頃と推測される。

竹越のこうした活動は高崎でも知られていたであろう。また、竹越は、同年2月に創刊された『国民之友』の特別寄書家にもなっていた⁹³⁾。

彼は、前橋からいったん帰京した後、6月に高崎に来て、約半年間滞在した。先に見た翻訳書と著書の出版をし、高崎英和学校の開校の後、11月頃に東京に去った。

彼が猶興学館で教えたのはこの頃であろう。深井が、俳人の村上鬼城から後に教えられたところでは、村上は、猶興学館で竹越がバジヨットの憲法論を講じるのを聞いたという(深井英五[1937]、『人物と思想』387頁)⁹⁴⁾。

深井自身は、猶興学館で竹越の講義を聞いたことがなく、また、村上と知り合うこともなかったが、それらは、竹越の高崎滞在の前年に既に彼が同志社に入学していたことを考えればつじつまが合う。村上が年上だったことから、深井は、『人物と思想』(386頁)で、自分が入門したのは村上が去った後だったのではないかと推測しているが、そうではなく、村上は、深井よりも後に猶興学館で学び、そこで竹越の講義を聞いたと考えるほうが整合的である。

また、既にキリスト教に入信していた山下は、竹越と教会活動で会っていたであろうから、山下自身が、竹越にこの講義を依頼したと考えてよいだろう。

竹越は、猶興学館の高崎英和学校への変更にも関与した。竹越熊三郎[1963](65-67頁)の推測によれば、竹越が高崎に来た目的には、岡本彦八郎との翻訳書の出版ばかりでなく、星野の依頼を受けてこの高崎英和学校を開設することもあったという。星野は、猶興学館を改変して、前橋英学校のようなキリスト教的色彩の強い英学校にしたいとの考えを持ち、

竹越に協力を求めたという⁹⁵⁾。そうだとすれば、おそらく、それは、星野に師事して熱心なキリスト教徒となった山下の考えでもあったのではないだろうか。

15 猶興学館から高崎英和学校へ

猶興学館は、校名が『孟子』から採られていることから考えても、その設立時点ではキリスト教の影響下にあるとは言えないであろう。しかし、拡張移転に際してその校名を変更したことは、学校の思想や倫理の基盤を、伝統的ないし儒教的なものから、近代的ないし西洋的なものに移行させようとしたことを示していよう。そして、そこにはキリスト教との密接な関連があったと言えるだろう。

高崎英和学校の開校式典(表2参照)において、開校の趣旨の演説が、設立者たちから竹越に委ねられたことは、まさに、そのことを端的に示していよう。加えて、星野も演説しているのである。

深井英五は、既に高崎にいないが、この式典は、彼が高崎で学んだ環境をあたかも象徴するかのようである。深井景員、星野光多、堤辰二、山下善之と、彼の恩師たちが次々に演壇に立っている。その顔ぶれなどから考えて、この式次第を準備したのは山下であろう。

深井英五のキリスト教入信は、山下と猶興学館に生じた変化と同じ大きな流れの中で理解されるべきだろう。

表2 高崎英和学校の開校式典の演説者(1887(明治20)年9月15日)

順番	内容	名前	肩書き・立場など
1	開校の趣旨	竹越与三郎	創立者に代って
2	祝辞朗読	吉見邦直	郡長
3	開校を祝する演述	深井景員	用掛(学務担任)
4	同上	星野光多	
5	同上	堤辰二	高等小学校長
6	祝辞朗読	菊地義男	生徒
7	同上	増田徹弥	同上
8	同上	浦上玉樹	同上
9	答辞(改称の由来)	山下善之	教員

(資料 『上野新報』1887(明治20)年9月17日⁹⁶⁾)

16 その後の山下善之

山下善之は、教員からキリスト教伝道へと転身した。ここでは、その歩みの概略のみ見でおきたい。

日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編[1983a](31頁)などによると、山下は、1887(明治20)年に東京一致神学校(すぐ後の明治学院神学部)に入学した⁹⁷⁾。これは、高崎英和学校の開校と同じ年である。ということは、彼は、高崎英和学校の開校のすぐ後に教師を辞して東京に行ったことになる。実際に、西群馬教会の名簿によれば、山下は、こ

の年の10月11日に、西群馬教会から東京の下谷一致教会に籍が移っている⁹⁸。

そして、佐波亘編 [1938] (64 - 65 頁) によれば、彼は、1889 (明治 22) 年頃に同教会で長老の役職に就いていることがわかる。これは彼の神学校在学中のことと考えられる。星野光多が、その前年に西群馬教会を辞任して同教会へ赴任している⁹⁹、彼は、星野を助けて同教会の運営にあたったことになる。

山下の卒業は、日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983a] (31 頁) によれば 1890 (明治 23) 年であった。ただし、山本喜蔵 [1943] では、「伝道の熱心さの為卒業しない中に学校を出」たとある¹⁰⁰。

日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983a] [1983b] によれば、彼は、いったん帰郷した後、1890 (明治 23) 年 4 月に栃木県の栃木町に伝道師として派遣され講義所を開設した¹⁰¹。これが現在の日本基督教会栃木教会である。開設の事情とそこでの様子については日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983a] に詳しい。彼は、そこで約 7 年間伝道に従事した後、1897 (明治 30) 年 9 月に北海道に転任した¹⁰²。

日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] の巻末の教職在籍表によれば、北海道では、まず紋もんべつ龍教会 (伊達教会、現在の日本基督教会伊達教会) に 1897 (明治 30) 年から約 9 年いて、この間に、室蘭伝道教会 (現在の日本基督教会室蘭教会) も兼任した。そして、1906 (明治 39) 年には湧ゆうべつ別伝道教会 (遠軽教会、現在の日本基督教会遠軽教会) に転任し、1935 (昭和 10) 年に引退するまで 30 年近い期間、そこを拠点に遠軽とその周辺地域の伝道にあたった。当初は、野付牛のつけうし伝道教会 (北見教会、現在の日本基督教会北見教会) も一時的に兼務した¹⁰³。

彼は、北海道での伝道に献身したピアソン宣教師夫妻 (夫の G・P・ピアソン、妻の I・G・ピアソン) と家族ぐるみで交際しており、また、自由民権家から牧師となって旭川教会や十勝監獄などで伝道した坂本直寛 (坂本龍馬の甥) とも交流があった¹⁰⁴。このため、ピアソン夫妻や坂本直寛の著作あるいは関連書籍には、山下への言及があり、彼からの書簡も引用されている¹⁰⁵。

彼の引退時の年齢は、生年を 1856 年とすれば数え年で 80 歳という高齢である。その後は、いったん旭川に移った後に¹⁰⁶、前に述べたように東京に住む長女のもとで余生を送った。そして、1945 (昭和 20) 年 3 月 4 日、一週間ほど床についた後、眠るように逝ったという¹⁰⁷。生年を 1856 年とすれば数え年で 90 歳という長寿である。なお、奇しくも、深井と同年の死去であった¹⁰⁸。

17 おわりに

山下善之と同じく、群馬県の士族出身の自由党の活動家で、キリスト教に入信して牧師となった人物の一人に、旧前橋藩士の斎藤壬生雄がいる。自由民権運動の頃の斎藤と山下は親しかった¹⁰⁹。しかも、ともに日本基督教会に属すことになり、日本基督教会北海道中会でも同席する巡り合わせになった¹¹⁰。

斎藤の人物像が丑木幸男 [2001] に詳しく描かれているのに比べると、山下の思想とその変遷は不明である。しかし、山下が、子供の病気のために家族と数年間離れて暮らすことになりながらも¹¹¹⁾、50歳頃からの残りの人生を遠軽での伝道に捧げたことは、次の二つの点で印象的である。

第一に、遠軽は、キリスト教を基盤とする大学を創設する目的で北海道同志教育会により開拓を始められた土地であったことである¹¹²⁾。このため、この土地は学田と呼ばれていた。同教育会とその事業は、山下が赴任する前に既に解体していたとはいえ、教育の理想から始まった開拓地であった。

第二に、当時の遠軽は交通が極めて不便な開拓地であり¹¹³⁾、山下は、自ら畑を耕作して半ば自給自足しながら農民に伝道するという生活をしたことである¹¹⁴⁾。前に述べたように、自由民権運動の際、上毛自由党が負債農民の組織化へと向かった段階で、彼は、何らかの理由により運動を離れた。ところが、遠軽では、彼自身が土地を耕しながら農民に伝道したのであった。

しかも、彼は、農村伝道について G・P・ピアソンと共通する認識を持っていた可能性もあるだろう。G・P・ピアソンは、彼を遠軽に招聘し¹¹⁵⁾、前に述べたように彼と家族ぐるみの交際をする関係であった。その G・P・ピアソンが、1907 (明治 40) 年 11 月に遠軽の教会の印象を次のように述べている。

「日本の力は田舎にある。そこに、近い将来の大きな活動分野がある - 農民を救え、しからば日本を救ったことになる。田舎の教会こそ、わたしたちの喜びであり、名誉である。彼らは堅実で、強く、また純粹である。神のもとで教会の永続、繁栄、勝利を保証するものと私たちが信じるのは、北光社や学田のような共同体 (教会) にほかならない。」(G・ピアソン [1978] 200 頁)

遠軽教会は、農村の教会としての実態と自負を持っていたようである。明治末年に教会堂を新築するに際しては、教会の土地に信者の共同耕作でハッカを 3 年間栽培して資金にあてた¹¹⁶⁾。新築後ではあるが、鳥居忠五郎 [1986] (23 - 40 頁) の次のような回想からは当時の雰囲気をつかうことができる。

「日曜日には昼食を馬車に積んで農村地域から家族ぐるみ集まってきて礼拝に出席し、済むと午後はさながら愛餐会である。信仰談、社交談、農作談義から政局談までも話が及んで実に賑やかだった。教会所有のハッカ畑があって、日曜の午後総員除草奉仕に出動するなど、東京では全く想像もつかない農村教会風景だった。」

また、1922 (大正 11) 年 4 月 2 日に、遠軽教会は、独立自給教会 (教団やミッションなどからの金銭援助を受けない教会) となったが、これは「純農村教会として、わが国最初の独立自給教会」だとして、後年の遠軽町役場編 [1957] (388 頁) などにも誇らしく記載されている。

山下は、遠軽の人々から敬愛される存在であったようである。その人柄は、清廉潔白で、金銭には全く恬淡とし、情熱を持ちつつ温厚であったという。それらは、鳥居忠五郎 [1986]

I・G・ピアソン [1978] (282 頁)、遠軽町役場編 [1957] (203 - 204、388 - 389 頁) などからうかがうことができる¹¹⁷⁾。

鳥居忠五郎 [1986] (68、81 - 82 頁) によると、山下の説教は、「語るほどに熱して胸を叩き、声を高めて人に迫ってくる語り口」だったという。また、賛美歌を歌う声は、「響くいい声であった」という。かつての高崎での演説会や猶興学館の教場でも、彼は、よく響く大声で熱烈な演説をしたのだろうか。

ところで、こうした山下のその後の歩みを、深井は知っていたのだろうか。

鳥居忠五郎 [1986] (79 頁) は、この二人が後年に再会したことを証言している。

「父が上京の折同氏 (深井のこと = 引用者) に招かれ訪ねた際、私は付き添いかたがた姉と共に同行して、師弟が楽しそうに昔話を懐かしむさまを目の当たりにした。」

残念ながら、その時期は不明である。ただ、「付き添い」という言葉からは、山下が高齢であることがうかがえる。

二人の会話は、当然、山下の近況にも及んだのではないだろうか。しかも、山下の連絡先を知って招待するほどであるから、深井は、山下のその後の歩みについてある程度まで事前に知っていたと思われる¹¹⁸⁾。

また、山下自身は、かつて自由党员だったことを隠してはいなかった。鳥居忠五郎 [1986] (81 頁) は、遠軽において、山下が、「昔は自由党だったが、今は不自由党だよ」と笑いに託して語るのを聞いたという。そのくらいであるから、兄の深井景員を通じて自由民権運動を知り、猶興学館で山下に学んだ深井が、山下の自由民権運動への参加を知らなかったはずはないように思われる。

二人が再会した時期と『回顧七十年』の執筆時期との関係は不明である。しかし、深井が、『回顧七十年』での山下についての記述で、多くを省略して、「政治運動に関心しながら、自らは之に参加せず」とのみ書いたのは、1941 (昭和 16) 年という出版年を考えると、自由主義やキリスト教への抑圧の強い時代の中で、存命である山下とその家族への配慮をしたものと考えるのが正しいように思われる。

注

- 1) 『人物と思想』162 頁。『回顧七十年』9、53 - 54 頁。若松兎三郎編 [1938] 31 頁などを参照。

また、報知新聞社通信部編 [1930] は、多少の脚色があるかもしれないが、深井英五の同志社時代について次のように書いている。「服装など他の生徒のやうに飾るわけには行かなかつたので、家から送られた二枚の着物で五ヶ年間を通した。(中略) つひには縞目もなにもなくなつて、たゞ着物の形をしてゐるといふに過ぎない有様だつた。(中略) 袴といふのが着物以上であつた。幸い着物は二枚あつたが、袴は小倉が一つきりである。(後略)」

同志社卒業生の山本徳尚は次のように回想している。「夏休みが済んで漸々学生が帰

校したのを見ると、皆随分質素な風をして居った。現に日本銀行の営業局長をして居る深井英五君等は、粗末な破れた着物に縄の帯をしめて黒い雪駄を履いて居った。先生の中にも縄の帯をして居った人もあった。」(同志社社史資料室編 [1986] 49 頁)

なお、報知新聞社通信部編 [1930] については注 54 を参照。

- 2) 深井英五は、別の回想文で次のように書いてもいる。「星野先生と猶興学館の館主山下善之先生とは高崎に於ける西洋文化の開拓者」(深井英五 [1937])
- 3) 萩原進 [1959a] 第 5 章、清水吉二 [1984] 第 1 章、岩根承成 [2004] 第 1 章などを参照。
- 4) 星野光多は、1885 (明治 18) 年 12 月 6 日、深井英五に洗礼を授けた (日本基督教団高崎教会 [2004] 141 頁)。

深井景員については、群馬県教育史研究編さん委員会編 [1981] 122 頁、高崎市教育史編さん委員会編 [1998] 321 頁。彼は、晩年にキリスト教徒となった。受洗年については日本基督教団高崎教会 [2004] 162 頁参照。

なお、彼や深井家については『旧高崎藩貫属明細短冊帳』も参照。

堤辰二については、群馬県教育史研究編さん委員会編 [1981] 127 - 128 頁、高崎市教育史編さん委員会編 [1998] 262 - 263 頁。また、『堤辰二先生頌徳碑』(明治 42 年) (高崎市編 [1927b] に収録) や坂口二郎編著 [1981] 119 - 120 頁なども参照。彼の祖父は家老であり、堤家の系図などについては田畑勉 [2001] に詳しい。高崎藩の家老職を読み込んだ狂歌については、根岸省三 [1974] 107 頁。
- 5) なお、当時の記録や新聞などでは、山下善之の名は「善三」あるいは「善三郎」となっていることがある。
- 6) 例えば、中川収 [1972]、福島恒雄 [1982]、遠軽町役場編 [1957] 第 2 篇第 6 章、遠軽町編 [1977] 第 10 編第 1 章など。
- 7) 山本喜蔵 [1943]、鳥居忠五郎 [1986] 82、254 - 255 頁など。

なお、海老澤亮編 [1920] 465 頁、同 [1921] 535 頁では、五男二女となっている。これは、それまでの間に一男一女と死別したためであろう。
- 8) 日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983a] に収録されており、拙稿では、同教会の久保真一郎牧師のご厚意により読むことができた。
- 9) 鳥居忠五郎 [1986] 287 - 295 頁。
- 10) 拙稿では、池田晶信氏のご厚意により読むことができた。
- 11) 群馬県教育史研究編さん委員会編 [1981] 122、127 頁、高崎市教育史編さん委員会編 [1998] 262、321 頁、星野達雄 [1987] 29 頁などを参照。
- 12) 高坂信彦 [2002] 11 頁などを参照。
- 13) 福澤研究センター [1986] 第 2 巻 255 頁。
- 14) 海老澤亮編 [1920] 465 頁、同 [1921] 535 頁。
- 15) 比屋根安定 [1935] 535 - 538 頁。

- 16) 鳥居忠五郎 [1986] 36 - 37 頁。
- 17) 安政 6 年 5 月の『高崎藩家臣分限帳』、明治 3 年の『高崎藩職員録』、明治 4 年の『高崎藩職制役席順』を参照。(群馬県史編さん委員会編 [1978] 139、146、149、162 頁。) また、明治 6 年頃に当時の熊谷県でおこなわれた貫属調査のうち『旧高崎藩貫属明細短冊帳』も参照。(高崎市史編さん委員会編 [1969] 751 頁。) なお、この短冊帳については、今井英雄 [1992] や高崎市史編さん委員会編 [1969] 729 頁を参照。
ただし、九如は号であろうから、山下九如という名前を直接見出すことはできない。
- 18) 慶應義塾 [1962] 340 頁。この記述は鳥居忠五郎が見出したものである(鳥居忠五郎 [1986] 78 頁)。
- 19) 前橋市史編さん委員会編 [1975] 1177 頁。
- 20) 嘉永 5 年の『子給帳』(前橋市史編さん委員会編 [1985] 282 頁)、文久 2 年 12 月から慶応 2 年 4 月までの『御築城別記録』(前橋市立図書館 [2003] 210 頁)。
また、『松平藩日記・川越』の天保 11 年 10 月晦日の記事にも山下領右衛門の名が見える(群馬県史編さん委員会編 [1986] 196 頁)。
山下領右衛門は、『御築城別記録』の元治元年 2 月 26 日の項では役職が「遊隊格」となっている(前橋市立図書館 [2003] 210 頁)。この「遊隊」とは、『橋藩私史』によれば、文久 2 年 11 月 21 日の藩政改革により従来の「大役人」を改称したものであり、「大役人」は算筆を主とする役柄であった(前橋市史編さん委員会編 [1985] 1084 頁)。
- 21) 福澤研究センター [1986] 第二巻 255 頁。
- 22) 『御築城別記録』(前橋市立図書館 [2003] 210 頁)。
なお、熊谷県の貫属調査の短冊帳から作成された前橋市史編さん委員会編 [1975] の住所別氏名一覧では、山下領平と他の山下姓の二人が掲載され、その住所は前橋周辺ではあるが萩村とはかなり異なる場所である(同書 1177 頁)。ところが、明治 6 年の熊谷県の『貫属家禄調 高崎支庁所轄分』においては、山下領平の名はないものの、上と同じ山下姓の二人が掲載されており、その住所は萩村を含む地域である。
- 23) 前橋市史編さん委員会編 [1978] 57、88 頁。
- 24) 西群馬教会の名簿によれば、山下善之の住所は高崎の柳川町である。これについては、日本基督教団高崎教会の塚本潤一牧師にご教示いただいた。
- 25) 前橋市史編さん委員会編 [1984] 1371 - 1383、1470 - 1480 頁。
- 26) 鳥居忠五郎 [1986] 18、31 頁の記述から計算したものである。
なお、鳥居忠五郎 [1986] 30 - 31、43 - 44 頁によれば、山下善之が、栃木教会から北海道の伊達教会に転じた際に、長男は、旧高崎藩士の養子となった。その記述から考えると、養父となったのは、高崎の共栄合資会社(共栄社、共栄舎)の社長だった人物の可能性が高い。同社は、穀物商と貸金業を営み、高崎商業会議所の初代議員に選ばれた。また、同社は、士族授産的な性格の会社と考えられている。ただし、山下

善之と同社との関係は不明である。これらについては、『旧高崎藩貫属明細短冊帳』(高崎市史編さん委員会編[1969]728頁)、高崎商工会議所100年史刊行委員会編[1995]79、435頁、高崎経済大学附属産業研究所編[1979]155-156頁、高崎市史編さん委員会編[2004b]515頁を参照。

- 27) 保証人は、士族で東京に住む富樫昌である。この人物については不詳である。
- 28) 遠軽町役場編[1957]では、山下善之は高崎師範学校卒業となっているが、そうした名称の学校は存在しないので、何かの誤伝と思われる。考えられるのは、高崎藩の藩校か、高崎に一時存在した烏川師範学校であろうか。
- 29) 松崎欣一[1998]392-393頁。
- 30) 松崎欣一[1998]397-398頁。
- 31) 演説会については松崎欣一[1998]を参照。
- 32) 宮部襄と長坂八郎については、清水吉二[1999]などを参照。
- 33) もし、そのように見た場合には、山下善之のすぐ隣に深井新蔵がいることも意味があるように思える。深井新蔵は、『慶應義塾入社帳』によると山下善之より早く1876(明治9)年に慶應義塾に入学しており、その際の保証人は長坂八郎であった(福澤研究センター[1986]第二巻56頁)。
- 34) 群馬県の自由民権運動については、徳江健・石原征明編著[1980]も参照。
- 35) 清水吉二[1984]46頁、岩根承成[2004]58頁などを参照。
- 36) 清水吉二[1984]80-81頁、岩根承成[2004]62-63頁などを参照。
- 37) 当時、堤辰二は既に高崎小学校に勤務していた。群馬県教育史研究編さん委員会編[1981]127-128頁などによれば、彼は、東京師範学校に1875(明治8)年に入学し、1877(明治10)年10月に卒業している。そして群馬師範学校の教員となるが、1890(明治13)年に退職し、同年4月に高崎小学校の教員となった。
なお、深井英五は、堤について「東京の高等師範学校に学んだ」(『回顧七十年』20頁)と書いているが、正確には、高等師範学校となる以前の東京師範学校である。
- 38) 清水吉二[1984]155、158頁。
- 39) なお、堤辰二と深井景員は、小学校教員であったから政治集会参加などが制約される立場だった。これについては、群馬県教育会[1927]678頁などを参照。また、当時の集会条例などについては広瀬順皓[1988]を参照。
- 40) 萩原進[1959a]74頁、清水吉二[1984]160頁などを参照。
- 41) 「郷原八徳の賊なり」とは、『論語』の巻第九「陽貨」第十七にあり、『孟子』の巻第十四「尽心章句下」で論じられている言葉である。「郷原」とは、村の善人のことで、世間にあわせていかにも良い人のように振舞う人を意味し、「郷原八徳の賊なり」とは、「郷原」はかえって徳をそこなう人物だという意味である。これに対して、『孟子』が望ましい人物とするのは、志ばかり大きく偉そうな事ばかり言う人物などである。(金谷治訳注『論語』、岩波文庫、1999年、352頁。小林勝人訳注『孟子』下巻、岩波文庫、

1972年、433 - 440頁)

- 42) 萩原進 [1959a] 74頁、清水吉二 [1984] 160頁などを参照。
- 43) 中之条には下吾妻郡の郡役所があった。高崎からは山下善之の他に三名が出かけた。不許可となった演題もあったと報じられているが、山下善之のものがそうだったのかどうか不明である。なお、参加者たちは自由共伸会の設立を決めたと伝えられているが、その詳細も不明である。
- 44) 岩根承成 [2004] 28 - 46、66 - 83頁。萩原進 [1959a] 134 - 150頁や清水吉二 [1984] 94 - 216頁なども参照。高崎での襲撃計画と、それを警戒した政府による開業式の延期については、徳江健・石原征明編著 [1980] 130 - 132頁、『高崎の産業と経済の歴史』187 - 192頁も参照。開業式は、群馬事件後の6月25日におこなわれた。
- 45) ただし、名簿の不備という可能性もあるかもしれない。
 なお、萩原進 [1959a] 82 - 83頁では、山下善之が名簿に掲載されているように見える。それは、名簿を収録した佐藤誠郎・原口敬明・永井秀夫編 [1955] には、名簿にないが『自由新聞』に党员として掲載された者の一覧が付記されており、それを含めたことによる。
- 46) 岩根承成 [2004] 82 - 83頁。
- 47) この説は、『回顧七十年』からの引用の際に「小学校」を「英学校」と誤写したことに起因するのではないだろうか。『回顧七十年』11頁にある「私は小学校生徒たりし時より英語を学ばんがために」の部分の「小学校」が、萩原進 [1959c] (565頁) や、群馬県教育史研究編さん委員会編 [1973] (594 - 595頁)、高崎市教育史編さん委員会編 [1978] (550 - 551頁) では、「英学校」となっている。上毛新聞社編 [1982] (443頁) にも、深井英五が高崎藩の英学校で学んだとの記述があるが、これらに依拠したためと思われる。
- 48) 群馬県教育会 [1927] 750 - 761頁の「私立学校調査表 明治十年至大正十四年一月」。この原資料となった猶興学館設立時の届出書類が残されていれば、設立の趣旨、教員、校舎など多くのことが判明すると思われるが、所在は不明である。
- 49) ただし、小学生でも、小学校の放課後に通学するのは自由であった。群馬県教育会 [1927] 617 - 628、652 - 654、666 - 671頁を参照。
- 50) 岩波文庫版によると次のようである。(小林勝人訳注『孟子』下巻、岩波文庫、1972年、329頁)

『孟子曰、待文王而後興者、凡民也、若夫豪傑之士、雖無文王猶興、』(孟子曰く、文王を待ちて而る後に興る者は、凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王なしと雖も猶興る。)

『孟子が言われた。「文王のような聖人の教化があって、はじめて発奮して立ち上がるのは、平凡な人民である。かの人なみすぐれた豪傑の士は、たとい文王のような教化がなくとも、自ら進んで立ち上がるのである。』』

山本喜蔵 [1943] や鳥居忠五郎 [1986] では猶興学館ではなくて「尚興館」として
いるが、これは、近親者が、「なおおこる」との読みを聞いて、「なお」に「尚」を誤
ってあてたものと思われる。

「猶興」を用いた当時の結社や学校の例としては、1879 (明治 12) 年の長野県松本
の猶興社 (後藤靖 [1973])、1880 (明治 13) 年の長崎県平戸の猶興書院 (現在の長崎
県立猶興館高校)、1883 (明治 16) 年の群馬県館林の猶興社 (群馬県史編さん委員会
編 [1987] 624 - 627 頁) などがある。このうち、松本の猶興社については、後藤靖 [1973]
が、慶應義塾生の猶興社にあやかっただけと推測している。

なお、猶興という名称の使用例は自由民権運動以前からあった。例えば、戊辰戦争
の際には、彰義隊とともに上野で戦った諸隊の中に、幕臣による猶興隊があったこと
が知られている。

- 51) 山下善之は、長男を剛、次男を毅と名付けた。それが、大河内輝剛や犬養毅にあや
かったものかどうか不明である。彼の子供の一覧は山本喜蔵 [1943]
- 52) 松崎欣一 [1998] 179 - 196 頁。なお、大河内輝剛と宮部襄の関係については清水吉
二 [1999] [2000] などを参照。
- 53) 明治 20 年の猶興学館の高崎英和学校への変更の際、『上野新報』9 月 17 日の広告で
は、高崎英和学校の設立者として、岡本六左衛門、清水元造、関根作三郎、中島仙助、
西岡半九郎、藤巻喜兵衛、矢島八郎の七人が載っている。これに対して群馬県への届
出書類『館主清水元造ヨリ猶興学館ヲ高崎英和学校ト改称シ設立者四名増員ノ旨届出
上申』では、校名変更の際に設立者に新たに変わったのが、岡本六左衛門、中島仙
助、西岡半九郎、矢島八郎の四人であることがわかる。これらから、猶興学館の最初
の設立者は、清水元造、関根作三郎、藤巻喜兵衛だと考えられる。

なお、岡本六左衛門の名は「六右衛門」と表記されていることがある。

- 54) 報知新聞社通信部編 [1930] は、深井英五の父の景忠の肖像写真を掲げている。こ
の写真は、おそらく『人物と思想』321 頁に述べられている写真であり、もしそうだ
とすると、深井英五から直接借り受けた可能性が高い。この点から考えても、内容は、
深井自身への直接取材に基づく部分が多いと推測される。しかし、事実と照らして明
らかに誤りの部分も少なからずあり、当時の深井の心境による事実関係の省略や、あ
るいは記者による聞き違いや脚色などがあるように思われる。

なお、長坂鑿次郎は、当時の深井の最も親しい友人で、深井が受洗してから約 4 ヶ
月後に、同じく西群馬教会で星野光多から受洗し、同志社に学んで牧師となった(『回
顧七十年』22 頁、日本基督教団高崎教会 [2004] 141 頁)。また、土橋佐多吉は、後に、
群馬県立高崎中学 (現在の高崎高校) の教師を長年にわたって勤めたようである。

- 55) 藤巻喜兵衛と山下善之が、猶興学館設立以前にどのような関係であったかは不明で
ある。ただし、吉田元 [1984] 3 頁によれば、藤巻は、板垣退助と関係を持っていた
らしい。藤巻は、板垣の媒酌で、旧土佐藩の毛利恭介の長女と、明治 11 年の春に結婚

した。藤巻家は、寛永以来の老舗であり、街道通行の名士の宿泊が少なくなく、明治維新以降は、高官や政客による資金・奉加の来訪が絶えなかったという。板垣も、遊説・奉加のため藤巻家を訪れたという。

56) 西群馬片岡教育会と『西群馬片岡教育通信録』については、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 842 - 843 頁、群馬県史編さん委員会編 [1983] 634 - 635 頁。

57) 『館主清水元造ヨリ猶興学館ヲ高崎英和学校ト改称シ設立者四名増員ノ旨届出上申』

58) 開校式典の様子は、『上野新報』1887(明治20)年9月17日。

『高崎英和学校移転届』(明治20年9月24日)によると、高崎英和学校は「校舍狭隘二付」新築移転したもので、新校舍は、敷地が203坪、建坪が53坪強であった。建物は、図面によれば次のようになっていた。

西洋造りの平屋1棟(3間×2間4尺の教場が3室)

日本造りの二階家1棟(1階は、2間3尺×2間の女子教場および教員詰所が各1室と、2間×2間の事務所が1室。2階は、2間3尺×2間の生徒寄宿所が2室と、2間×2間の生徒寄宿所が1室)。

日本造りの平屋1棟(5間3尺×1間3尺の食堂が1室)。

便所が2棟。

なお、図面には、深井景員により「木造造り」との補足がある。

『明治20年県下諸学校(除小学校)表』によると、高崎英和学校の学科は英語、学期年数は3年、教員は男4名、生徒は男85名女5名、卒業生なしとなっている(群馬県史編さん委員会編 [1983] 50 - 51 頁)。

その後、『明治27年西群馬郡公立諸学校(小学校ヲ除ク)表』では、学級数が2で、教員は男2名、生徒は男69名女17名、卒業生は男13名女2名となっている。

しかし、生徒減少により、休校した後、1899(明治32)年に廃校となった(『私立英和学校生徒減少ニヨリ維持困難ニ付廃校ノ旨届出』)。

59) 『館主清水元造ヨリ猶興学館ヲ高崎英和学校ト改称シ設立者4名増員ノ旨届出上申』

60) 群馬県議会図書室編 [1966] 271、485 頁、上毛と京濱社編集部編 [1913] 309 - 312 頁などを参照。

61) 細野格城 [1911] 48 頁、群馬県議会図書室編 [1966] 271、485 頁、根岸省三 [1974] 60、154 頁などを参照。西岡半九郎については、根岸省三編 [1959] 80 頁、同 [1964] 43 頁などを参照。藤巻喜兵衛については吉田元 [1984] も参照。

なお、清水元造については、不明なことが多いが、1874(明治7)年に、大区小区制の小区の戸長の候補となっている(高崎市史編さん委員会編 [1995] 43 頁)。

62) 表1の業種のうち、太織については、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 482 - 494、506 - 507 頁を参照。呉服太物については、高崎市編 [1927b] 296 - 297 頁を参照。中牛馬については、高崎市編 [1927b] 69 - 74 頁、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 536 - 538 頁を参照。

- 63) 高崎市編 [1927a] 115 - 117 頁などを参照。当選者は 30 名であった。
- 64) 高崎商工会議所 100 年史刊行委員会編 [1995] 79、435 - 436 頁。
- 65) 高崎商工会議所 100 年史刊行委員会編 [1995] 79、435 頁を参照。
明治 30 年の『高崎繁昌記』では英三郎、明治 31 年の『高崎繁昌鑑』では六左衛門という名前になっているのは、襲名の事情と関係しているのだろうか。ただし、明治 32 年 3 月の『私立英和学校生徒減少ニヨリ維持困難ニ付廃校ノ旨届出』は、校主の清水元造の代理として岡本英三郎の名で提出されている。
高崎の有力な商家には、代々同じ名前を継いでいくものがあり、中島仙助や藤巻喜兵衛もそうであったようである（高崎市史編さん委員会編 [2004a] 333、408、444 頁など）。
- 66) 吉田元 [1984] は入手困難であり、拙稿では、日本基督教団高崎教会の塚本潤一牧師のご厚意により読むことができた。
また、藤巻喜兵衛とキリスト教については、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 864 頁も参照。
- 67) 吉田元 [1984] 4 - 6 頁。
- 68) 『上毛高崎倉賀野伝道史』1 号、日本基督教団高崎教会 [2004] 30 頁、星野達雄 [1987] 82 - 88 頁。
- 69) 日本基督教団高崎教会 [2004] 32 - 40 頁、星野達雄 [1987] 90 - 112 頁、丸山知良 [1992] 102 - 124 頁。西群馬教会は無教派の独立教会として設立され、1888(明治 21) 年 3 月に組合教会に加入した（日本基督教団高崎教会 [2004] 34 - 36、44 - 46 頁）。
- 70) 日本基督教団高崎教会 [2004] 140 頁。
- 71) 吉田元 [1984] 10 頁。
- 72) 『回顧七十年』11 頁では「有志」となっていて、一人なのか複数なのか不明だが、『人物と思想』329 頁では「有志諸氏」となっている。また、報知新聞社通信部編 [1930] では、学資について「恩師の藤巻氏や教会の世話を受け」とある。
なお、実業之日本社編 [1930] や経済資料社編 [1936] では、星野光多や新島襄も深井英五に奨学金を出したように読めるが、誤りであろう。
- 73) 吉田元 [1984] 11 頁。
- 74) 吉田元 [1984] 26 頁。
- 75) 日本基督教団高崎教会 [2004] 142 頁。ただし、海老澤亮編 [1920] 465 頁、同 [1921] 535 頁では、3 月 1 日となっている。
- 76) 俳人の村上鬼城もその一人であった。しかし、彼は、星野光多に学びつつもキリスト教に格別な心を寄せることはなかったと考えられている（中里昌之 [1985] 54 - 57 頁）。
- 77) 同志社で深井英五の先輩だった徳富蘆花の小説『黒い眼と茶色の目』に出てくる「浅井敬吾」という少年は深井であると考えられており、入学早々から英語においては図

抜けた秀才と評判の少年と書かれている（1939（昭和14）年の岩波文庫版の49頁）。

また、深井自身が『回顧七十年』16 - 17頁で回想しているところによれば、同志社2年生のときにプラトンの英訳を図書館から借り出そうとして、図書係の米国人教師から、それは難しすぎると注意されたという。

78) なお、すぐ後で述べるように、星野光多は、山下善之と同時期に慶應義塾で学んだことがあったが、その頃に二人が知り合っていたかどうかは不明である。

79) 星野達雄 [1987] 43 - 50 頁。

80) 同志社山脈編集委員会編 [2003] 180 - 181 頁など。

81) 星野達雄 [1987] 83 - 84 頁。

82) 松本亦太郎については、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 863 - 864 頁や同志社山脈編集委員会編 [2003] 120 - 121 頁などを参照。彼は、心理学者になり、京都帝国大学や東京帝国大学の教授となった。深井英五とも交際があった。松本亦太郎 [1939] には明治初期の高崎の様子なども描写されている。

松本勘十郎については、高崎市史編さん委員会編 [2004b] 863 - 864 頁や、共愛学園百年史編纂委員会編 [1998] 第4章などを参照。

83) 『同志社英学校生徒名』（明治17年4月）には、二年生にこの三人の名があり、松本亦太郎 [1939] の記述が裏付けられる。

なお、同志社には湯浅治郎の弟の吉郎（半月）が既に在学していた。

84) なお、岡本六左衛門と松本勘十郎は、1884（明治17）年に、同志社の専門学校創立の義捐金にも応じている（『明治専門学校創立義捐金申込書 付創立賛成者姓名並義捐金各地取扱銀行表』）。ただし、岡本六左衛門は柏屋六右衛門と表記されている。

85) 会社の設立は1881（明治14）年1月である。高崎経済大学附属産業研究所編 [1979] 155 - 157 頁を参照。『上毛高崎倉賀野伝道史』1号では「質店」と表現されている。

『上毛高崎倉賀野伝道史』1号自体もそこで作られた。また、西群馬教会の設立に関与したフルベッキも、この家の「広大な広間」での集会に参加している。フルベッキの書簡（1884年3月11日、フェリス宛）の中では、「老父」が岡本六左衛門、「息子」が英三郎だと思われる。この書簡については、丸山知良 [1992] 102 - 124 頁を参照。

86) 日本基督教団高崎教会 [2004] 140 頁。岡本英三郎の名は、『上毛高崎倉賀野伝道史』や日本基督教団高崎教会 [2004] などでは「栄三郎」となっている。

87) 上野直蔵編 [1979a] 134 - 137 頁。

88) 竹越熊三郎 [1963] 64 頁。

89) 竹越熊三郎 [1963] 71 頁 - 73 頁。

90) 竹越熊三郎 [1963] 64 頁。

91) 竹越与三郎については武田清子 [1987] 第1章なども参照。前橋教会堂については青柳新米 [1937] を参照。

- 92) 上毛青年会や前橋青年談話会については、群馬県史編さん委員会編[1991]245 - 251頁、竹越熊三郎[1963]、飯田裕子[1976]などを参照。
- 93) 竹越与三郎の年譜については高坂信彦[2002]の巻末のものなどを参照。
- 94) 村上鬼城については、中里昌之[1985]などを参照。
- 95) 萩原進[1959b]356頁は、堤辰二が星野光多に師事していたとしており、竹越熊三郎[1963]のこの部分でそれが引用されているが、詳細は不明である。なお、そこでの表記は、辰二ではなくて「辰司」となっている。
- 96) 群馬県教育史研究編さん委員会編[1981]122頁および高崎市教育史編さん委員会編[1998]321頁によると、深井景員は、明治18年に高崎町学務委員となり、明治19年から4年間は学務専任係となって、職員の給与、旅費の出納、学校用品の調達、修繕補修など学校事務いっさいを担当した。その後、明治22年2月に高崎尋常小学校長となった。これから考えると、開校式典の記事での役職名は正式には学務専任係であろう。
- なお、記事での堤辰二の名前は「辰司」になっている。
- また、記事では、清水元造は、校主ではなくて「仮校主」となっているが、その理由は不明である。
- 97) 海老澤亮編[1920]465頁、同[1921]535頁も参照。
- なお、福島恒雄[1982]226頁では、山下善之は「1897年に明治学院神学部に入学生し伝道者になっている。」とあるが、これは1887年の誤りではないかと思われる。
- 98) これについては、日本基督教団高崎教会の塚本潤一牧師にご教示いただいた。
- 99) 星野達雄[1987]186 - 189、206 - 207頁。
- 100) 海老澤亮編[1920]465頁、同[1921]535頁では、彼の受按は、明治24年4月5日となっている。
- 101) 『七十路会の会員名簿』で、山下善之の教役就任が明治23年となっているのは、これを指すと思われる。
- 山本秀煌編[1929]167 - 173頁によれば、日本基督教会第七回大会(明治24年11月)において、栃木は、東京第二中会部内の伝道地であり、山下善之は、同中会部内の伝道師となっている。
- 102) 北海道転任の際の記念の集合写真が日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編[1983b]に収録されている。その写真で、中央に立っている山下善之の前で椅子に座っている女性は、鳥居忠五郎[1986]の口絵の写真との比較から、妻の山下ぶんではないかと思われる。
- 103) 山下善之が、遠軽(湧別)教会に着任するまでの間については、不明ないし誤伝と思われるものも存在する。日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編[1983a]の遠軽教会の歴史の項では、山下は、「伝道者として各5教会を経て遠軽に赴任した」(31頁)となっている。この5教会が何を指すのかは不明である。遠軽町役場編[1957]

204 頁では、「伊勢崎、桐生、群馬、栃木、伊達の各教会を経て遠軽に赴任してきた」とあり、5 つの教会名が具体的にあげられている。しかし、伊勢崎、桐生、群馬の 3 教会については何かの誤伝と思われる。念のため、3 教会の教会史にあたったが、そうした事実は確認できなかった。伊勢崎教会については、「伊勢崎教会二十五年史」(明治 42 年)(伊勢崎市編『伊勢崎市史 資料編 4 近現代』伊勢崎市、1987 年)。桐生教会については、石黒悦雄編著『教会百年史』日本基督教団桐生教会、1978 年。群馬教会については、五十年史編纂委員会編『見えざる聖手 - 教会創立五十周年史並記念文集 -』日本基督教団前橋中部教会、1980 年。

- 104) 坂本直寛については、吉田曠二 [1985] や松岡信一 [1986] などを参照。
 なお、ピアソン夫妻が帰国する前の日本基督教会北海道中会 (1928 年) は、遠軽教会が会場であり、山下善之がピアソン夫妻の送別の祈禱をしている (日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] 161 - 170 頁)。彼とこの夫妻の親しい関係からこのように配慮されたのであろう。
- 105) 例えば、土居晴夫編 [1970] 145 - 147 頁、I・G・ピアソン [1978] 41、185、192 - 194、198 - 199、282 頁、小池創造 [1967] 78、86 頁、池田晶信編著 [2000] 3、16 - 27、114 - 124 頁などである。
- 106) 遠軽町役場編 [1957] 389 頁、遠軽町編 [1977] 1232 頁。
- 107) 鳥居忠五郎 [1986] 82、277 頁。
- 108) 深井英五が死去したのは 1945 (昭和 20) 年 10 月 21 日。
- 109) 清水吉二 [1984] 40 頁。
- 110) 日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] 3 - 5 頁。
- 111) 鳥居忠五郎 [1986] 23 - 40 頁。
- 112) 詳細は、中川収 [1972] 参照。
- 113) 鳥居忠五郎 [1986] は、山下善之の労苦をしのんで次のように書いている。「鉄道が近くまで開通した、といっても遠軽から野付牛までは 63 キロ、留辺蕊^{るべしべ}までは 42 キロ、いずれも途中 12 キロある「五合の峠」を越えて歩かねば汽車に乗れなかった。まして、それらが開通するまでは旭川まで歩いて汽車に乗った。(中略) 熊の足跡を見ながら峠を越したこともあったという、雨の日、雪の日もあったろう・・・(中略) 途中店など一軒もない。」(80 頁)
- 114) 鳥居忠五郎 [1986] は、山下善之の農作業について次のように思い出を記している。「父は夏は暇さえあれば畑へ出て耕作作業をしていた。じゃが芋、かぼちゃ、きゅうり、なす、とうきび、豆が畑に植えてあった。(中略) 父の養鶏のお蔭で毎朝新鮮な卵を食べた。」(68 頁)
- 115) 中川収 [1972] などを参照。
- 116) 遠軽町役場編 [1957] 204 - 205 頁。
- 117) 山下善之は、教師試補から教師になる試験もなかなか受けなかったようである。

ようやく 1926 (大正 15) 年 11 月 15 日になって、日本基督教会北海道中会の臨時中会で彼を教師にする議案が提案され、満場起立で可決されて教師になった (日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] 154 頁)。生年を 1856 年とすれば数え年で 60 歳である。

- 118) 深井英五は、晩年の星野光多と交際があった (若松兎三郎編 [1938] 33 頁)。山下善之と星野は同じ教派に属していたから、深井は、星野から山下の消息を聞く機会があったかもしれない。

文献

- 青柳新米 [1937] 『前橋基督教会略史』(非売品)(1986年に復刻)
- 飯田裕子 [1976] 「若き日の竹越与三郎 - 前橋時代をめぐって - 」『地方史研究』26 巻 1 号
- 池田晶信編著 [2000] 『北海道開拓時代の宣教師 ピアソン夫妻』ピアソン会事務局
- 今井英雄 [1992] 「旧高崎藩士族の動向 - 『明治六年 旧高崎藩貫属明細短冊帳』を中心として - 」『高崎市史研究』2 号
- 岩根承成 [2004] 『群馬事件の構造 - 上毛の自由民権運動 - 』上毛新聞社
- 上野直蔵編 [1979a] 『同志社百年史 通史編 1』同志社
- 上野直蔵編 [1979b] 『同志社百年史 資料編 1』同志社
- 丑木幸男 [2001] 『志士の行方 - 斎藤壬生雄の生涯 - 』同成社
- 海老澤亮編 [1920] 『基督教年鑑 昭和六年版』日本基督教連盟年鑑部 (1994年に日本図書センターより復刻)
- 海老澤亮編 [1921] 『基督教年鑑 昭和七年版』日本基督教連盟年鑑部 (1994年に日本図書センターより復刻)
- 江森巳之助 [1959] 「深井英五論 - 思想する官僚の一頂点 - 」『思想の科学』3 号
- 遠軽町編 [1977] 『遠軽町史』遠軽町
- 遠軽町役場編 [1957] 『遠軽町史』遠軽町役場
- 共愛学園百年史編纂委員会編 [1998] 『共愛学園百年史 上巻』共愛学園
- 群馬県議会図書室編 [1966] 『群馬県議会史別巻 群馬県議会議員名鑑』群馬県議会
- 群馬県教育会 [1927] 『群馬県史 第四巻』群馬県教育会
- 群馬県教育史研究編さん委員会編 [1973] 『群馬県教育史 第二巻 (明治編下巻)』群馬県教育委員会
- 群馬県教育史研究編さん委員会編 [1981] 『群馬県教育史 別巻 人物編』群馬県教育委員会
- 群馬県史編さん委員会編 [1978] 『群馬県史 資料編 10 近世 2』群馬県
- 群馬県史編さん委員会編 [1979] 『群馬県史 資料編 19 近代現代 3』群馬県
- 群馬県史編さん委員会編 [1983] 『群馬県史 資料編 22 近代現代 6』群馬県

- 群馬県史編さん委員会編 [1986] 『群馬県史 資料編 14 近世 6』群馬県
- 群馬県史編さん委員会編 [1987] 『群馬県史 資料編 21 近代現代 5』群馬県
- 群馬県史編さん委員会編 [1991] 『群馬県史 通史編 7 近代現代 1』群馬県
- 慶應義塾 [1962] 『福澤諭吉全集 第 19 巻』岩波書店
- 経済資料社編 [1936] 「深井英五」経済資料社編 『財界驍将伝』経済資料社（芳賀登ほか編
『日本人物情報体系 第 37 巻』皓星社（2000 年）に収録）
- 小池創造 [1967] 『田舎伝道者 - ピアソン伝道師夫妻 - 』北見教会出版
- 高坂信彦 [2002] 『ある明治リベラリストの記録 - 孤高の戦闘者 竹越與三郎伝 - 』
中央公論新社
- 後藤靖 [1973] 「自由民権期の交詢社について（1）」『日本史研究』133 号
- 坂口二郎編著 [1981] 『実録たかさき - 高崎市制施行 80 周年記念 - 』上毛新聞出版局
- 佐藤誠郎・原口敬明・永井秀夫編 [1955] 『明治史料第一集 自由党员名簿』明治史料研究
連絡会
- 佐波亘編 [1938] 『植村正久と其の時代 第三巻』教文館
- 実業之日本社編 [1930] 「代用教員から日銀副総裁 深井英五氏奮闘伝」実業之日本社編 『財
界巨頭伝』実業之日本社（芳賀登ほか編 『日本人物情報体系 第 35
巻』皓星社（2000 年）に収録）
- 清水吉二 [1984] 『群馬自由民権運動の研究 - 上毛自由党と激化事件 - 』あさを社
- 清水吉二 [1998] 「高崎藩騒擾録」『高崎市史研究』9 号
- 清水吉二 [1999] 「高崎藩騒擾録その二 - 輝剛擁立一件 - （1）」『高崎市史研究』10
号
- 清水吉二 [2000] 「高崎藩騒擾録その二 - 輝剛擁立一件 - （2）」『高崎市史研究』12
号
- 清水吉二 [2001] 「高崎藩騒擾録その三 - 安岡良亮登場 - 』『高崎市史研究』13 号
- 上毛新聞社編 [1982] 『群馬県人名大辞典』上毛新聞社
- 上毛と京濱社編輯部編 [1913] 『上毛紳士録』上毛と京濱社
- 杉沢一美 [2004] 「深井英五をめぐる諸論考 - 今後への課題 - 』共愛学園前橋国際大
学論集』4 号
- 高崎経済大学附属産業研究所編 [1979] 『高崎の産業と経済の歴史』高崎経済大学附属産業
研究所
- 高崎市編 [1927a] 『高崎市史 上巻』高崎市（1981 年に国書刊行会より復刻）
- 高崎市編 [1927b] 『高崎市史 下巻』高崎市（1981 年に国書刊行会より復刻）
- 高崎市教育史編さん委員会編 [1978] 『高崎市教育史 上巻 明治大正編』高崎市教育委員
会
- 高崎市教育史編さん委員会編 [1998] 『高崎市教育史 人物編』高崎市教育委員会
- 高崎市史編さん委員会編 [1969] 『高崎市史 第一巻』高崎市

- 高崎市史編さん委員会編 [1995] 『新編 高崎市史 資料編9 近代現代』高崎市
- 高崎市史編さん委員会編 [2004a] 『新編 高崎市史 通史編3 近世』高崎市
- 高崎市史編さん委員会編 [2004b] 『新編 高崎市史 通史編4 近代現代』高崎市
- 高崎商工会議所100年史刊行委員会編 [1995] 『高崎商工会議所100年史』高崎商工会議所
- 竹越熊三郎 [1963] 『竹越三叉 - 青少の頃 - 』(群馬県立図書館所蔵)
- 武田清子 [1987] 『日本リベラリズムの稜線』岩波書店
- 田畑勉 [2001] 『上州の藩士と生活』上毛新聞社
- 土居晴夫編 [1970] 『土佐群書集成第25巻 坂本直寛著作集(下)』高知市立市民図書館
- 同志社山脈編集委員会編 [2003] 『同志社山脈 - 113人のプロフィール - 』晃洋書房
- 同志社社史資料室編 [1986] 『創設期の同志社 - 卒業生たちの回顧録 - 』同志社社史資料室
- 徳江健・石原征明編著 [1980] 『事件と騒動 - 群馬民衆闘争史 - 』上毛新聞社出版局
- 鳥居忠五郎 [1986] 『生かされた八十路』(非売品)
- 中川収 [1972] 『北海道同志教育会と救世軍遠軽小隊及び遠軽教会の形成』『キリスト教史学』26号
- 中里昌之 [1985] 『村上鬼城の基礎的研究』桜楓社
- 日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983a] 『恩寵回顧 - 日本基督教会栃木教会 歴史資料集 - 』日本基督教会栃木教会
- 日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983b] 『恩寵回顧(写真集) - 日本基督教会栃木教会 歴史資料集 - 』日本基督教会栃木教会
- 日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983a] 『北のひとむれの歩み - 日本基督教会北海道中会の諸教会の歴史と年表 - 』札幌北一条教会
- 日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] 『日本基督教会北海道中会記録 1903年 - 1961年』新教出版社
- 日本基督教団高崎教会 [2004] 『日本基督教団高崎教会百二十年史』日本基督教団高崎教会
- 根岸省三編 [1959] 『高崎人物年表』高崎市社会教育振興会
- 根岸省三編 [1964] 『高崎産業経済史』高崎市社会教育振興会(1981年に吾妻書館より『高崎郷土産業史』の書名で再刊)
- 根岸省三 [1974] 『中山道高崎宿史 - 本町・九蔵町・田町・連雀町・新町・八島町 - 』高崎市社会教育振興会
- 萩原進 [1959a] 『群馬県史 明治時代 第一分冊 政治・行政篇』高城書店
- 萩原進 [1959b] 『群馬県史 明治時代 第三分冊 宗教・文化篇』高城書店
- 萩原進 [1959c] 『群馬県史 明治時代 第四分冊 教育・社会篇』高城書店
- 原教編 [1913] 『高崎藩近世史略 上・下』(非売品)
- I・G・ピアソン [1978] 小池創造・吉田邦子訳 『六月の北見路 - 北辺のピアソン宣教師夫妻 - 』日本基督教会北見教会ピアソン文庫

- 比屋根安定 [1935] 『日本近世基督教人物史』基督教思想叢書刊行会 (1992 年に大空社より復刻)
- 広瀬順皓 [1988] 「『近代演説討論集』を終えて」『近代演説討論集 別巻』ゆまに書房
- 深井英五 [1937] 「村上鬼城翁と左右田喜一郎氏」『上毛及上毛人』239 号
- 深井英五 [1939] 『人物と思想』日本評論社
- 深井英五 [1941] 『回顧七十年』岩波書店
- 福澤研究センター編 [1986] 『慶應義塾入社帳』(全 6 冊)慶應義塾
- 福島恒雄 [1982] 『北海道キリスト教史』日本基督教団出版局
- 報知新聞社通信部編 [1930] 「日銀副総裁 深井英五」報知新聞社通信部編『名士の少年時代 新人国記 関東編』平凡社
- 星野達雄 [1987] 『星野光多と群馬のキリスト教』キリスト新聞社
- 細野格城 [1911] 『高崎五万石騒動』(1975 年にあさを社より復刻)
- 前橋市史編さん委員会編 [1975] 『前橋市史 第三巻』前橋市
- 前橋市史編さん委員会編 [1978] 『前橋市史 第四巻』前橋市
- 前橋市史編さん委員会編 [1984] 『前橋市史 第五巻』前橋市
- 前橋市史編さん委員会編 [1985] 『前橋市史 第六巻 資料編 1』前橋市
- 前橋市立図書館 [2003] 『前橋藩松平家記録 第二十八巻』煥乎堂
- 松岡僊一 [1986] 『幻視の革命 - 自由民権と坂本直寛 - 』法律文化社
- 松崎欣一 [1998] 『三田演説会と慶應義塾系演説会』慶應義塾大学出版会
- 松本亦太郎 [1939] 『遊学行路の記』第一公論社
- 丸山知良 [1992] 『群馬のキリスト教』みやま文庫
- 山本秀煌編 [1929] 『日本基督教会史』日本基督教会事務所 (1973 年に改革社より復刻)
- 山本喜蔵 [1943] 「初代牧師山下善之先生の事ども (日本基督教会栃木教会小会歴史編纂委員会編 [1983a] に収録)
- 吉田曠二 [1985] 『龍馬復活 - 自由民権家坂本直寛の生涯 - 』朝日新聞社
- 吉田元 [1984] 『一粒の種子 - 高崎教会の創立期の人 藤巻喜兵衛 - 』あさを社
- 若松兎三郎編 [1938] 『下村先生追憶録』(非売品)

資料

第 4 節

- 『慶應義塾入社帳』(福澤研究センター編 [1986] に収録)
- 『七十路会の会員名簿』(昭和 10 年 4 月)(比屋根安定 [1935] に収録)

第 5 節

- 『高崎藩家臣分限帳』(安政 6 年 5 月)(群馬県史編さん委員会編 [1978] に収録)
- 『高崎藩職員録』(明治 3 年)(群馬県史編さん委員会編 [1978] に収録)
- 『高崎藩職制役席順』(明治 4 年)(群馬県史編さん委員会編 [1978] に収録)

- 『旧高崎藩貫属明細短冊帳』(明治6年)(高崎市史編さん委員会編[1969]に収録)
 『松平藩日記・川越』の天保11年10月晦日の記事(群馬県史編さん委員会編[1986]に収録)
 『子給帳』(嘉永5年)(前橋市史編さん委員会編[1985]に収録)
 『御築城別記録』(文久2年12月から慶応2年4月まで)(前橋市立図書館[2003]に収録)
 大藤彬編『橋藩私史』(明治33年3月)(前橋市史編さん委員会編[1985]に収録)
 『貫属家禄調 高崎支庁所轄分』(明治6年)(群馬県立文書館所蔵)
 福澤諭吉『明治十年以降の知友名簿』(慶應義塾[1962]に収録)

第8節

- 『群馬新聞』明治13年8月7日、18日(前橋市立図書館所蔵)
 『上毛新聞』明治14年10月2日、4日(高崎市史編さん委員会編[1995]に収録)
 『自由新聞』(1972年に三一書房より復刻)
 『自由党員名簿』(明治17年5月)(佐藤誠郎・原口敬明・永井秀夫編[1955]に収録)

第9節

- 『館主清水元造ヨリ猶興学館ヲ高崎英和学校ト改称シ設立者四名増員ノ旨届出上申』(明治20年7月6日)(群馬県立文書館所蔵)
 山下善之「猶興学館景況通信」『西群馬片岡教育通信録』第1号(明治20年3月31日)(高崎市教育史編さん委員会編[1978]553-554頁の注に収録)
 『上野新報』明治20年9月17日(群馬県史編さん委員会編[1979]に収録)

第10節

- 『高崎英和学校移転届』(明治20年9月24日)(群馬県立文書館所蔵)
 『明治20年県下諸学校(除小学校)表』(『上野教育会雑誌』第9号掲載)(明治20年)(群馬県史編さん委員会編[1983]に収録)
 『明治27年西群馬郡公私立諸学校(小学校ヲ除ク)表』(『私立諸学校一覧表』)(明治27年)(群馬県立文書館所蔵)
 『私立英和学校生徒減少ニヨリ維持困難ニ付廃校ノ旨届出』(明治32年3月14日)(群馬県立文書館所蔵)
 『上州高崎繁栄勉強一覧』(明治18年)(高崎市史編さん委員会編[1995]に付図として収録)
 篠田尚久編『高崎繁昌記』(明治30年)(1990年にあさお社より復刻)
 『高崎繁昌鑑』(明治31年)(高崎市立図書館所蔵)

第11節

- 星野光多『上毛高崎倉賀野伝道史』1号(明治16年7月)(群馬県史編さん委員会編[1983]に収録)

第13節

『同志社英学校生徒名』(明治17年4月)(上野直蔵編 [1979b] に収録)

『明治専門学校創立義捐金申込書 付創立賛成者姓名並義捐金各地取扱銀行表』(明治17年5月)(上野直蔵編 [1979b] に収録)

第16節

『日本基督教会北海道中会記録』(日本基督教会北海道中会歴史編纂委員会編 [1983b] に収録)

Abstract**Yoshiyuki Yamashita and Yuukougakkan:
In the youth of Eigo Fukai in Takasaki****Kazumi SUGISAWA**

Eigo Fukai, who was the Governor of the Bank of Japan from 1935 to 1937, was born in 1871 and grew up in Takasaki. He learned English and was influenced by Christianity in his youth.

In his autobiography, he mentioned his four teachers who taught him in Takasaki. One of them was Yoshiyuki Yamashita, who taught Fukai internal and external affairs and English at Yuukougakkan, which was a school in Takasaki for the Chinese classics and English.

In order to grasp Fukai's surroundings in Takasaki, this paper investigates Yamashita's personal history which Fukai did not mention in the autobiography.

Before 1884 Yamashita was involved in the civil rights movement for the establishment of the Diet. In 1884 he took part in the foundation of Yuukougakkan.

The name of Yuukougakkan came from Confucianism. But Yamashita and Kihei Fujimaki, who was one of the founders of it, were converted to Christianity as well as was Fukai. They renamed Yuukougakkan and reformed it to Takasaki Eiwa School in 1887. And Yamashita left Takasaki in order to go into the Church.